

萬野アクトリーズスタジオ・平成9年都立三田高校公演台本

## 合言葉は宇宙

作・演出 萬野 展

### 登場人物

こぎつね・操舵室

茜 あかね 航海長。二十六歳。

霞 かすみ 副航海長。二十七歳。

望 のぞみ 航海士。二十六歳。

こぎつね・通信室

雫 しずく 通信長。二十五歳。

武藤 むとう 通信科員。二十四歳。

こぎつね・レーダー室

累 かさね 観測長。二十二歳。

紬 つむぎ 観測科員。二十一歳。

後藤 ごとう 副観測長。二十歳。

須藤 すとう 観測科員。二十五歳。

こぎつね・攻撃センター

栞 しおり 攻撃隊長。二十七歳。

伊藤 いとう 攻撃副隊長。二十五歳。

江藤 えとう 料理長。二十八歳。

こぎつね・各部屋（レーダー室除く）

MC 高性能人間型コンピュータ。

地球・管制室

加藤 かとう 管制室長。三十歳。

佐藤 さとう 副室長。二十四歳。

鼎 かなえ 宇宙工学技師。二十一歳。

工藤 くどう 宇宙心理学者。二十歳。

\*\*\*

女の子

【注記】この台本は、一九九八年、萬野アクターズスタジオ公演として、都立三田高校にて上演されたものに、若干の修正をくわえたものである。著作権は萬野展が有する。当台本の無断上演を禁ずる。

## プロローグ／夜／一億回の人生 シーン1

巨大な宇宙船が何処いずことも知れぬ宇宙空間を進んでいる。

宇宙船内部。夜である。  
宇宙に昼も夜もあつたもんじゃないが、宇宙船の中ではとりあえず夜と名付けられた時間が流れている。  
大きな窓に無窮もぎゆうの宇宙が広がっている。  
その窓際に女の子が一人座っている。  
傍らには男が一人立っている。

男 眠れないの？

女の子 ……うん。

男 もう夜だよ。

女の子 ……みんなは？

男 もう寝てるよ。

女の子 ……ねえ、MC。

男(MC) なに？

女の子 夜ってなに？

MC ……寝る時間のことさ。

女の子 どうして部屋を暗くするの？

MC 眠りやすいように。

女の子 どうして暗いと眠くなるの？

MC 人間はみんな、最初暗いところにいたんだ。暗いところでみんな眠っていたんだよ。だから人間は暗くなるとそのことを思い出して、眠くなるんだ。

女の子 私、思い出さないよ。なにも。

MC 思い出してるんだ。でも気がつかないだけ。

女の子 そうなの。

MC そう。

女の子 ……宇宙はいつも、暗いね。

MC そうだよ、人間はみんな、そこから来たんだ。

女の子 どこから？

MC ここからじゃ見えない、うんと遠いところさ。

女の子 ……あ、ほら、MC。

MC ん？

女の子 あそこ、明るいよ。

MC ……。

女の子 ほら、ぼうつとして、赤く霞んでる。

MC あれは赤色巨星だよ。

女の子 セキショク、キョセイ？

MC この間、星の話をしたよね？

女の子 うん。あんなに小さく見えてても、本当はうんと大きいんだよね。それでみんな燃えてるんでしょ？

MC そう。星には、燃える星と石で出来た星がある。石の星は、たと喻えば君の生まれた地球みたいに、燃える星のまわりをまわってる。燃える星は自分で自分を燃やしながら光ってる。そうやって燃え続けて、最後どうなると思っつ。

女の子 ……どうなるの？

MC たとえば、あんなふうに。

女の子 大きくなるの？ 赤い霧みたくなるの？

MC もとの大きさの何万倍にも膨らんで、それで一生を終えるんだよ。

女の子 ふうん。星も死んじゃうんだね。

MC 人間よりずっと長生きだけだね。

女の子 どのくらい？

MC そうだな…一億倍くらい。

女の子 ……一億倍？

MC 君の人生を一億回繰り返すくらい。

女の子 ……わかんない。

MC そうだな…例えば君が1として、君の子供が2、君の孫が3…そうやって番号をつけていくとしよう。いい？

女の子 うん。ホントはもっといい名前を付けてあげたいけど。

MC ただの番号だよ。で、君の曾孫が4、そのまた曾孫が…

女の子 ……？

MC そう。そうやって、それがずっとずっと続いて、番号が一億になるくらいの長さ。

女の子 ……やっぱりわかんない。

MC 燃える星は、そのくらい長生きってこと。

女の子 石の星は？

MC ……え？

女の子 燃える星があんなに膨らんじゃったら、そばで回ってる石の星はぶっ壊しちゃうの？

MC 飲み込まれてしまうんだ。赤い霧に。

女の子 そしたらどうなるの？

MC 蒸発してしまう。凄い温度だからね。

女の子 ……。

MC 大丈夫だよ。一億倍も長生きなんだから。遠い遠い未来の話さ。

女の子 でもいつかは…。

MC そう、いつかは…。

女の子 なんだか…。

MC ……ん？

女の子 ……地球に帰りたくなっちゃったな。

MC ……。

女の子 ……ねえ、MC。

MC ……ん。

女の子 どこまで飛ぶの？

MC ……。

女の子 どこまで、この船は、飛ぶの？ 地球からこんなに遠くまできて、まだまだ飛ぶの？

MC そうだね、まだまだ、飛ぶんだ。

女の子 飛び始めてからもう半年だよな。

MC そうだね。よく覚えてるね。

女の子 このごろ、なんだかよく思い出すの。

MC そう。

女の子 最初はもつとウキウキしてた。初めて宇宙船に乗って、初めて宇宙を飛ぶのが、楽しくて仕方がなかったような気がする。でも、最近は何、なんだか違うの。

MC … ホームシックだね。

女の子 みんなは平気なのかな。わたしだけかしら？

MC みんな元気じゃないか。

女の子 他の部屋の人は？ この船にはもつとたくさんの方が乗ってるんでしょう？  
どうして他の部屋に行っちゃいけないの？

MC 規則なんだよ。それがこのツアーの規則なんだ。

女の子 どうして？

MC そう決まっているから。

女の子 どうして決まっているの？

MC それが規則だから。

女の子 …。

MC さあ。もう寝なさい。

女の子 …うん。

MC お休み。

女の子 お休み、MC…。

女の子、退場。

MC、しばし星空を眺め、退場。

## 操舵室 / 黄金週間 / 右折 シーン 2

操舵室。

航海長・茜が椅子にふんぞり返って珈琲など飲んでいる。窓越しに、前方に広がる宇宙空間を眺めている体である。

わざとらしい電子音や金属音が聞こえ、宇宙船らしい雰囲気かそを醸し出しているが、それらはすべてそこに置いてあるアイワのラジカセから流れ出ているということが明白であって、もいっこうにかまわない。

茜 …… いやあ広い。広いねえ、宇宙ってば。… まあ、なんだ、宇宙より広いものなんてこの世にないんじゃないかなんてアタシなんか思っただけでもさ。それにしても実際こうして出てきてみると、んー、やっぱり広い。んー広い。なんてゆーか、… 星雲… … 銀河？ … えー、そいでもって、えー… … 惑星… … 彗星とか… あ、百武彗星… … えー、特に… エイリアンなんかすくて… そいでもって、えー… … とにかく広い… 広くてなにもないね。うん。特に云うべきこともないよ、うん。そんなとこだね。

M C、登場。

M C なにやってるんですか。

茜 あら、M C、やあだ、見たの？ ちょっとホラ、航海日誌つけてたのよ。

M C 今のが？

茜 そうよう、文句ある？

M C あきれるほど乏しい宇宙知識ですね。

茜 うるさいわね。

M C 広い広いつて云ってるだけじゃないすか。

茜 他に思いつかないのよう。

M C なんすか、百武彗星って… ゼンゼン関係ないでしょ。

茜 しょうがないでしょ、大体あたしは船長でもなんでもないんだから。文句云うならあんたやんなさいよね。

M C いちおう航海長でしょ茜さんは。もともと航海日誌っていうのは茜さんの役目なんですよ。

茜 あたし航海長なの？

M C ライセンス持つてるでしょ！

茜 だってー、三十分講習受けただけなのよ、それも午前中でさあ、あたし朝駄目のよ。血圧低くて。

M C …… こんなヒトを宇宙に出しちゃっていいのかなあ…

茜 なによ、あんた、アンドロメダのくせに人間サマに向って生意気な口聞くんじやないわよ。違うわよ、えー、あれよ…

M C アンドロイドと云いたいんでしょうけど

茜 そう云おうと思ったのよ今！

M C それも違います、わたしは人間型のコンピュータであって、アンドロイドでもヒューマノイドでもエイリアンでもありません。

茜 どこがどう違っつていうのよ、まったく…

M C だいたいこのわけのわからん音はなんですか。

M C、ラジカセをガシャンと止める。  
ピコーンピコーンという宇宙基地のような音が止み、静寂が訪れる。

茜 だってえ、ムード出ないじゃないのよう…

M C ムード出す必要はないんです！

茜 せつかく宇宙なのになあ。

M C なに訳の判んないこと云ってんですか。

茜 じゃあB面にしてよ。

M C …(ため息をひとつ。黙ってテープを入れ替える)…なんですかコレ。

茜 なにっとなによ。落語よ。枝雀。

M C なにが悲しゅうて宇宙空間で落語聴かなきゃならんのだ…。

副航海士・霞、登場。

M C おはようございます。

霞 …。(暗い、といつか心ここにあらずの体)

茜 なによ、なんか暗いわね。

霞 …あッ！……あ、イヤイヤイヤ…

茜 ハア？

M C 霞さん？

霞 …でも、やっぱり…そうよそんな筈…あッ待って、そうあれば…イヤイヤませか…でも、あッ！…あイヤイヤイヤイヤ

M C 霞さん、なに云ってるんですか？ どうしました？ しっかりして下さい！…茜さん落語止めませんか。

茜 もう！(テープ止める)

M C 霞さん？

霞 M C！ 今日は何日？

M C は。

霞 今日は何日？

M C 船内時間で五月二日ですが。

霞 (息を飲む)…そうよね…。

茜 地球じゃもうゴールデンウィークよ！ ねえM Cあたしたちもゴールデンウィークしましょっよ！

M C はあ？

茜 どうか出掛けましょっよって云ってんの。

M C どこへ？

茜 どこへってそりゃ、それらしいところよ。

M C それらしいところとは？

茜 遠くへ行くのよ遠くへ。旅行！

M C 旅行。どこへ。

茜 …だから、えー、普段行かないような…エンジン室とか…レーダー室とか…行ってどうするんですか？

茜 だから行ってえ、羽根を伸ばしてえ、思いっきりエンジンを点検したり…リッチな気分で…レーダー角調整を満喫したり…

M C 泣かなくてもいいでしょ。

霞 MC！ 三十足す二は？

MC 三十二。

霞 (息を飲む) ……そうよね…。

MC 何なんですか。

霞 じゃあ、じゃあよ、これはどつ……難しいわよ…あなたの高性能人工知能はこの難問についてこれるかしら…善くって…いくわよ…三十二引く二十九は？ ああ云わないで！ わかっているの、わかっているのよう！

MC 茜さんホラ泣かないで、こっち落語より面白いですよ。

茜 いやよう、せっかくゴルデンウィークなのに！ どっか行きたい！

霞 三！ 三十二引く二十九は三！…今まで真面目に生きてきたのに…神様のバカ！ バカな神様…。

航海士・望、登場。

望 おはよう、なんの騒ぎ？

茜・霞 おはよう…。

MC ああ、望さん、おはようございます。

望 おはよう、MC。…どつしたの？

MC 茜さんはいつもの退屈病です。霞さんはどうやらなにか勘違いしてるみたいです。すね。

望 なんか、朝っぱらから濃くない？ 空気が。

MC これから少し薄めます。

望 どうぞ。

MC えー、みなさん、とにかく落ち着きましよう。まず茜さん。我々はこうやって既に大宇宙を旅してるわけですから、恒星間飛行ツアーという、人類始まって以来の大旅行してるわけですから、いまさら小旅行しなくてもいいでしょ、ね、ね？ なにが大旅行よ。ずっとこの部屋にいるだけじゃない。もっと、なんて云つたの、こう喻えば、強引に車線変更したり、靴脱いで前の座席に足載ついたり、百五十円の缶コーヒー飲んだり…

MC 喻えが善く判りません。

茜 ときめきたいのよ！

MC なるほど、判りました。

茜 アンタ絶対判ってない。

MC その件に関しては前向きに検討しましょう。さて霞さん。

霞 (息を飲む)

MC いや、呼んだだけですから。

霞 苛めないで。

MC 苛めてません。先程の計算に就いてですが…

霞 ……忘れて。

MC 無理です。コンピュータですから。いいですか霞さん落ち着いて聞いて下さい。そんなことはありません。

霞 ……で、でも…

望 ねえ、それなんの話？

茜 この子なんか様子がへんなのよ、さつきから。



望 あんたヒトのこと云えんの？

茜 なによ。

望 どうヘンなのよ。

茜 いきなり今日は何日！ って食ってかかったり、なんか、引いたり割ったり…

M C 割ってません。

茜 アレなんの意味だったの？ アンタ判ってんの？

M C (頷く)

望 ああ、勘違いって、そういう…

M C はい。

茜 なによなによ、なんでわかるの。あたしにも教えてよ。

M C (霞に) いいですか？

霞 ダメ！

M C ダメだって。

茜 なによ、教えてよ、楽しい話？ ときめく？

M C 泣いてるでしょ、ずっと。

茜 (望に) 教えてよ。

望 霞ちゃん、いい？

霞 ダメ！ ゼッタイ……ダメ。

望 ダメだって。

茜 水臭いわね、同じツアーの仲間じゃないの。なにがあったの？ 相談に乗るわよ。

望 あんた退屈してるだけじゃない。

霞 だって…やっぱり…ダメ…

M C もう一押し。

茜 じれったいわねもう、M C、航海長命令よ。教えなさい。

M C いいですか？

霞 …ダメ…

茜 云って。

M C いいですか？

霞 …。

M C 自分で云います？

霞 …あなた云って…。

M C 生理が来ないんです。

茜 (息を飲む)…はあ？

M C ね、あり得ないでしょ。冷静に考えて下さいよ。あなたの他にこの部屋にいるのは茜さんと望さん、それと人間型コンピュータである私だけ。だからそんなことになるわけないでしょ。

霞 だって…だっておかしいわ！ 自慢じゃないけど、私、正確無比なの。初めての時からずっと、一日の狂いもなく二十八日周期でこれまでやってきたのよ。正確。それが私。それだけは自信があった。正確。無比。それはもう、いつ厚生大臣から表彰されてもおかしくなくらいに…

M C なんてそんなもんが表彰されるんです。

霞 それくらい正確ってことなの。嘘えよ。

M C 善く判らない嘘えですね。

霞 この前が丁度四月一日だったの。そして今日が五月の二日。もう三日の遅れよ。  
 M C たかが三日でしようが。ただ遅れるだけですよ。  
 霞 たとえ天地がひっくり返ってもそれは絶対あり得ないわ。  
 望 もの凄い自信ね。  
 霞 ちょっと二三日遅れる、普通の人ならそれもいかもしれない。でも私よ。あり得ないわ。他でもないこの私なのよ。余りの正確さにNHKスペシャルから取材に…  
 望 来たの？  
 M C (同時) 来たんですか？  
 霞 喻えよ。…おかしいわ。なにかが起こっているのよ。  
 M C なにかってなんですか。  
 霞 なにか…恐ろしい事よ。私…イヤな予感がする…。  
 望 考え過ぎじゃないの。  
 霞 いいえ、私にはわかるの。これは恐ろしい事件の前触れなのよ。この宇宙船を襲う目眩く怪事件の前兆…  
 茜 判った！(どん、と床を踏みならす)  
 M C わあ、吃驚した。なんですか、なにが判ったんですか。  
 茜 シンシン判った！(どん)  
 M C 二度やらなくていいですから、なにが判ったか云ってください。  
 茜 夜・這・い。  
 M C …。  
 茜 夜這いよ！  
 M C なにが。  
 茜 だから夜這い。夜な夜な男が忍んできて、一夜の恋の情熱のボルテージがスパークするときめきハッピーニング…！  
 M C なんのこっちゃ。  
 茜 この宇宙船には夜這い男が徘徊しているのよ！  
 M C そんなわけないでしょう！  
 茜 例えばホラ、通信室の武藤なんて如何にも好き者そつな顔してるじゃない。  
 M C あのですねえ…  
 茜 誰！ 正直に云いなさい霞、お姉さん悪いようにはしないから。  
 望 いつから姉妹になったのよ。  
 茜 誰なの？ 名前云って。武藤？  
 霞 …嘘、そんな、だつて私、なんにも…  
 茜 …気づかなかつたつて云うの？ そんな善くないでしょ。そんな勿体ない…じゃなくて…節操のない…じゃなくて…えー  
 M C 茜さん、ちょっと落ち着いて下さい。あのね、そんな事ある訳ないんですよ。なに云ってんのよ。燃える男の情熱の放射線の前にはエイリアンもエイドリアンも敵じゃないのよ。  
 M C あんたこそなに云ってんだ…。そつじゃなくてね、いいですか、みなさんご承知の通り、この部屋の状態は、温度湿度気圧明るさ時間の経過、そしてドアの開閉に至るまで全て私に通知され記録されています。ツアーが始まって半年間、この部屋の外に通じるドアは一度も開閉されていないんです。

望 一度も？

M C ハイ、一度も。ですから、茜さんの夜這い男説も空論です。この部屋には半年間、誰も出入りしていません。

霞 と、云うことは…。

M C ハイ。

茜 半、年、間！

M C ハイ？

茜 信じらんない。半年間よ。六ヶ月よ。六ヶ月もこんな部屋に閉じこめられてんのよ。冗談じゃないわよ。

M C ああまた話がズレていく…。

望 でもそれって一理あるわよね。

M C そういふ規則なんですから。このツアーは一組三人以内が規則なんです。みなさんも参加するときに説明を受けたでしょ。

望 それよ。なんかヘンじゃない、その規則って。一組三人はいいとしたって、なんで他の部屋に行っちゃいけないの？ そこがもうひとつ納得できないのよね。

M C 規則っていうのはだいたいそういうもんじゃないですか。

望 だって理由が判らないじゃないの。

茜 そうよ。だいたいね、あたしたちはツアーの客よ。あんた云ってみればツアーコンでしょ。客が退屈してんのよ。ツアーコンとしてなんとかする義務があるでしょ。

M C そんなこと云われても。

茜 だいたい宇宙なんてただッ広いばかりで飽きちゃっわよ。もっとなにかびっくりするような出来事とか突発的な事件とかそういうっねえ…

突如としてアラームが鳴り響き、警告灯が明滅する。

茜 え、え、なに？

望 突発的な事件みたいよ。

茜 嘘、やあだ、あたしのせい？

M C 望さん、レーダー見て。霞さん、艦内放送！

霞 (マイクに向かって) えー、こちら操舵室。全艦乗員へ。ただいま操舵室にて警報発令。原因を究明中。しばらくお待ちください。(望に) …判った？

望 … 右舷後方から小物体。

M C 数は？

望 数は、えー、えー、たくさんよ、たくさん！

霞 (マイクへ) 全艦乗員へ、こちら操舵室。警報は小物体群の接近…

M C 茜さん、運転席！

茜 レーダー室の連中、なにやってんのよ！ (毒吐きながら運転席へ) (M C 手動に切り替えて下さい。)

茜 どっちから来るって？

望 右っしろ！ このままいくとぶつかるわ！

茜 左折するわよ。

霞 (マイクに) 左に曲がります。揺れますのでご注意ください。

茜、ハンドルを切って強引に左折する。  
宇宙船の底の方で、巨大な金属が軋む。遠心力がすべてを右になぎ倒そうとする。

茜 どうよ。

望 まだコースに入ってるわ。減速して。

茜 振り切れないの？

望 向こうの方が速いわ。あと七秒。

茜、ものも云わずギアを一段下げる。

地鳴りのような轟音とともにエンジンブレーキがかかり、全員前のめりに。

茜 どうよ！

望 左に切り続けて！ ギリギリよ！

茜 パワステくらいつけてよね、もうっ。

望 来るわよ！

霞 (マイクに) 隕石群が右舷をかすめます。総員念のため衝撃に備えてください。

望 先頭のが来るわ…右舷三キロメートル…

茜 三キロ…！ 目と鼻の先じゃないの…

望 通過するわよ！

息詰まる沈黙。無意味だが心情として全員右を見ている。

しばし、警告灯の明滅のなか、加速するアラームだけが聞こえている。

霞 どう？

望 …。(レーダーを凝視している)

茜 どうなのよ。ああ手が痺れる…。

望 …ほとんど通り過ぎたわ。もう大丈夫よ…。

全員、緊張を解いてため息。

霞 (マイクに) 操舵室より全艦乗員へ。隕石群は通過。繰り返します。隕石群は本艦を通過…

MC お見事、航海長。

茜 任せなさいよ。だてに講習受けてないわよ。

望 あんたほとんど寝てたじゃないの。

MC 茜さん、ゆっくり減速して下さい。軌道を修正しましょう。

茜 (上機嫌に) はいよー。

突如として轟音。

衝撃。全員が悲鳴とともに床に投げ出される。

倒れたまま動かない四人を警告灯の明滅だけが照らしている。

暗転。

# リーダー室／一人輪唱／宇宙海賊 シーン3

リーダー室。

観測長・累と観測科員・紬が睨み合っている。

累・紬 ……ジャン、ケン……………ポンッ！

累、負ける。

累 わあああつ。

紬 ……っしやあー！ 五連勝！

累 五連敗…。

紬 ささ、どうぞどうぞぞ。

累 もうネタないよー。

紬 累ちゃん芸達者だから。

累 紬ちゃんズルいよー、さつきからあたしばっかり！

紬 いいからいいから、ホラ早く。

累 もうやめようよー。

紬 (手拍子) お次の番だよかつさつねっ、アソレかつさつねっ、アヨイショかつさつねっ…。

累 くっそー…調子に乗りやがって…。

紬 アドッコイかつさつねっ、アドシタかつさつねっ…。

累 (やけくそ気味にバーンと手を挙げ) 五番観測長・累。一人輪唱いきまーすッ！

紬 (拍手) おーッ！ やんやんやんや！

累 (咳払い) しつずかな湖畔の森の陰から、もう起きちゃ湖畔のカコが陰からカコ起きちゃカコがカコカコが鳴コー、カコかな湖畔カコりのカコから、もうカコのカコカコカコが鳴くから、もうカコちゃいカコとカコがカコー、カコーカコー、カコカコカコー！

累は輪唱の各パートを「ちやませ」にして唄っている。

紬 ……。

累 ……なんなの今の。

紬 ……だから一人輪唱よ。

累 わかんない。

紬 なにが。

累 なにもかも。

紬 あんたバカ？

累 なにが面白いの今の。

累 ムカつく、こいつ…。

紬 もう一回やっつて。

累 絶対ヤ。

紬 ジャン、ケン…。

累・紬 ポン。(累負ける)

紬 やって。

累 いつか殺す…。六番観測長・累！一人輪唱パート2いきまーすッ！……カー  
 エールーのうーたーが、きこるのうーたーよー、ゲッこえてゲッるよー、ゲッ  
 げるゲッげるくわっくわッ、か口えろる口のロウーたーグワッ、きこえてうー  
 たーがー…

紬 ……。

累 ……つまりどういうこと？

累 うるさいわね！ ほっといてよ！

紬 累ちゃん、なにか悩み事があるの？

累 いいから一人にして！

スピーカーから雑音混じりの声が聞こえてくる。

スピーカーの声 ……えー……ちら…舵室……乗員へ……だいま操舵室にて警報……

は究明中……ださい……った？……

累 ……なに？

紬 霞さんの声だわ。なんかあったみたい。

累 操舵室の霞さん？

紬 そうだと思っけど……なによ！ 違うわよ！

累 後藤さんたち呼ぼうか。

紬 まだ寝てるわよ。あの人たち放っとくと昼まで寝てるんだから。

累 もうお昼だよ……。

アテになんないわ。

紬、マイクをとって呼びかける。

紬 こちらレーダー室、こちらレーダー室、操舵室応答願います…

スピーカーの声（かぶって）……こちら操舵室……警報は小物体群……右舷後方  
 より急速接近中……数、多数……

累 隕石？

累、紬、顔を見合わせる。

計器の前に行き、計器をあちこち調整、スクリーンを見上げる。

紬 右舷って云ったわよね。

累 なにも映ってないわ。

紬 おかしいわね……。

観測員・後藤、登場。

後藤（欠伸しつっ）なに、どうしたの？

累 あ、後藤さん！ たいへん……

スピーカーの声 ……左に曲がります。揺れますのでご注意ください……

後藤 はあ…？ おうあっ！

強烈な右G。轟音。

累と紬は物に掴まって踏ん張るが、後藤はあえなく転がりつつ右袖に退場。

後藤 おわあ〜……(退場)

累 左折してる…!

紬 手動に切り替わってるわ!

累 と云うことは…

紬 茜さんの運転よ!

累、紬、顔を見合わせる。十字を切って天に祈る。  
後藤、再登場。

後藤 いきなりなんなんだよ! どうなってんだよ、え!

地響きとともにエンジンブレーキがかかり、後藤前へ。

後藤 むおほっ!

累たちの足下へ転がってくる後藤。

後藤 …ぐぐぐ…(なんとか立ち上がりつつ)…お、はよ、う…

累・紬 おはようございまあす。

後藤 なんか、あったの、かなあ?

紬 隕石らしいんですけど…

累 須藤さんは?

後藤 まだ寝てる。あいつはこんな程度じゃ起きないよ、うおっ!

再び減速G。三人は踏ん張る。

後藤 …すげえ運転だな。

累 茜さんです。

後藤 え…。(神妙に十字を切る)

スピーカーの声 …隕石群が右舷をかすめます…。ため衝撃に備えてください…。

後藤 隕石群…?

紬 変でしょ。メインリーダーになにも映ってないのに…。

後藤 とにかく衝撃に備えよう…。

後藤と累、ショック対応姿勢をとる。

須藤、パジャマ姿で枕を抱いて登場

踏ん張る三人の後ろを、ふらふらと通り過ぎる。

須藤 (寝ぼけまなこで見る)ん…

後藤 (目が合う)須藤!…おまえ、こら、そんなかつこでぶらぶらしてる場合じゃないんだよ!

累 須藤さん! なにかに掴まってください。

後藤 あ、あ、わかった、わかったから。

後藤 わかってないだろ! だから、なんでもなさそうに歩くなよ!

須藤 ちよっと、齒磨いてから…

後藤 いや、そういう問題じゃなく…おい! こら! ちよっと!

紬 須藤さんてば!

後藤 あ、おれ今日銀行いかなきゃ…

須藤、ふらふらと退場。

後藤 なんなんだあいつは！  
累 協調性ないですよね。

右Gが弱まり、轟音が小さくなっていく。

後藤 お。

スピーカーの声 …… 操舵室より全艦乗員へ…… 群は通過…… 繰り返します…… 隕石群は  
本艦を通過……

後藤 とりあえず無事だったみたいだな。

須藤、再登場。相変わらずパジャマ姿。

後藤 おまえはまあだそんなカッコしてる……。

累 須藤さん、もうお昼です。

須藤 ままま。

紬 今、大変だったんですよ。

後藤 ん、そうね。

後藤 (少し囁き声で) どうすんだよ、計画は

後藤 どうって？

後藤 なんか、ケチついた感じじゃねえか。

後藤 ん、続行。

後藤 続行っておまえ、ならそのカッコなんかかしろよ！ (と云いつつ腕時計を見る)

紬 …… 計画って、なに？ なんの話？

後藤 (同じく腕時計を見て) あと五秒。

後藤、須藤、同時に上を見る。  
遠く爆発音。かすかな振動。

後藤 …… 予定通り。

後藤 (ため息) じゃあ……。

後藤 いきましょう。やりましょう。ね。レッツ、ゴー。

紬 なに、今の？ 隕石が当たったのかしら？

後藤 …… いやあ、たぶん、違う……と、思う、な。

紬 なんて？ なんて判るの？

後藤 わかるんだな、これが。

紬 どういうこと？

後藤 どういうこと。

須藤の手に銃が現れる。

紬 ……？

後藤 ごめん。そいでもってこつこつと。

後藤の手に銃。

後藤 おとなしく、ア云つこと聞いて、もらおうか。

紬 なに？ これ。



後藤 触らない触らない。これは銃と云って、その昔、人に云うことを聞かせるために使った、怖い道具。

紬 云うこと聞いているじゃない、今。

後藤 そういう意味じゃなくてね。

須藤 命令を聞くということよ。

紬 命令？

須藤 つまりね、われわれは、なにを隠そう、宇宙をまたにかける犯罪者軍団、宇宙海賊なわけです。

紬 宇宙海賊？

後藤 そう。ツアーの客に見せかけて、この船に乗り込んでいたわけだ。

須藤 見せかけたって云うか、ちゃんと金も払ってるから、ホントにツアー客なんだけどね。

後藤 今までのところはね。

須藤 隕石騒ぎは予定外だったけど、スケジュール通り、これからお仕事に入ります。

さっきの爆発はその合図。

後藤 君は人質というわけだ。

紬 冗談じゃないわよ。誰が海賊の命令なんかきくもんですか。銃だかなんだか知らないけど、そんな古道具みたいな怖くないわよ。ね、累ちゃん。

累 うーん。

紬 累ちゃん？

累 でも、けっこう威力はあるのよね。

紬 …。

累 ごめんね、紬ちゃん。

累の手にも銃。

紬 …嘘才。

累 この部屋で紬ちゃんだけ部外者だったじゃない。巻き込まないようにしたかったんだけど…。

須藤 人質がいたほつがなにかと便利かなあなんて思いました。私ボスに進言しました。

紬 ボス？…って、まさか…

累 はーい。(挙手)

須藤 そういうわけで、じゃあ、参りましょうか。

紬 どこ行くの？

後藤 もちろんこの船で一番大事なものが入っている部屋。中央倉庫だよ。

紬 倉庫？ そんなのあるの？

累 行くわよ。

須藤 オーケー。イツァ、ショウタイム！

後藤 だからおまえ着替えてこいって云つの…。

累、須藤、後藤、銃を向けられたままの紬、退場。

## 操舵室／不死身の茜／小旅行 シーン4

操舵室。茜、霞、望、MCが倒れている。  
望が気がつく。

望 ……あ痛たた……まいったわね……ちょっと、平気？  
茜 ……んー…  
望 霞ちゃん…霞ちゃんてば、しっかりして！  
霞 ……なにがあったの？  
望 わかんない。  
霞 隕石が掠ったの…？  
望 レーダーでは確かに全部通り過ぎたように見えたけど。  
霞 一個見落としたのかも…。  
望 ないとは言いきれないけど…。  
霞 そうだとしても直撃は免れたわけね。  
望 そうね。直撃だったら今頃木っ端微塵のはずよ。  
霞 機械は？  
望 (計器の様子をみて)……ダメみたい。死んでるわ。  
霞 ……MC、MC！……MCもダメみたい。あたしたちじゃ直せないわよ。  
望 壊れちゃったのかしら…。  
茜 (がばと起きあがって) チャンス。  
望 あんた気づいてたの。  
茜 不死身の茜さんと呼んでちょうだい。  
霞 なにがチャンスなの？  
茜 トラベルチャンス。  
霞 はあ？  
望 あんたまさか…  
茜 今こそは旅立ちのチャンス。宇宙船「こぎつね」探検旅行へ、いざ行かん！  
霞 探検旅行？  
茜 そうよ。絶対のチャンスじゃないの。この宇宙船のなかを探検するのよ。  
望 あんた、この非常時によくそんな脳天気なこと考えつくわね。  
茜 なに云ってんの、この機会逃したら、また延々この部屋で、見飽きた顔相手のエブリデイじゃないの。  
望 お互い様。  
霞 お生憎様。  
茜 だから旅立ちましょ、お互いの平和のためにも。なんたってゴールデンウィークだし。  
望 だつて、どこ行くのよ。  
茜 あてのない旅もまた一興。  
霞 MC、このままにしとくの？  
茜 とりあえずベッドに運んでやりましょ。そのうち目が覚めるわよ。

三人、MCを運び(舞台外へ)、戻ってくる。

茜 じゃあ出発するわよ。いやならここに居ていいのよ。無理にとは云わないわ。  
望 行くわよ。どうせあんた一人でも行くんでしょ。  
霞 ほっとけないわよね。

茜 ホントは行きたいくせにさず。…ほんじゃあ、まあ、出発！

茜、意気揚々と退場。  
霞、望、顔を見合わせているが、追って退場。

## 通信室 / 金魚鉢 / 姥捨て シーン 5

通信室。

寝起きの副通信長・武藤、マイク片手に登場。

武藤 もしもし、もしもし、「こちら」「こぎつね」、コードネームフォックス、通信室  
武藤でえす。もしもし…どうぞー！

武藤 応えを待つて黙るが、返ってくるのはただ沈黙のみ。

武藤 …もしもし、えーこちら宇宙船「こぎつね」通信室、副通信長武藤でえす。落  
ち武者の武、フジッコ煮の藤でムトウでえす。地球管制室、地球管制室、応答  
願います。…つかしいな。もしもし。おーい、ちぎゅっ。こちら武藤だよ  
。誰か。

とかなんとか呼びかけ続ける武藤。

通信長・雫、登場。

雫 …あ…だる…

武藤 あ、通信長、ちよつと通信おかしいんだけど…

雫 …あんた今何時だと思ってるの…

武藤 いや、だって雫さんも聞いたでしょ。さっきのドスーンて音。

雫 あ痛てて、頭いて…これやっぱ飲み過ぎだあ…

武藤 気がついたらベッドから床に転げ落ちてるし。雫さんの部屋平気でした？

雫 なにがよ。

武藤 なんか滅茶苦茶なんですよ。本棚倒れてるし、金魚鉢割れて金魚出てるしポット  
とか転がってるし。…僕も転がってるし…

雫 あんた寝相悪いんじゃないの。

武藤 そうですけどね。

雫 あたしの部屋はいつもと同じ。

武藤 変わりなかったですか？

雫 なんにも。

武藤 床になんか落ちてるとか…

雫 床見えない。

武藤 …は？

雫 だから床は見えないの、あたしの部屋は。

武藤 なんだ、おんなじじゃないですか。いつも散らかってるから気がつかないんです  
よ…しかもなんか全部ものが右に寄ってるんですよ。なんなんだろう…。

雫 どうでもいいけどさ、今何時よ。まだ夜中じゃないの？

武藤 だって気になるじゃないですか。

雫 うお、お、お、お、腰が…いた…う、ふう〜（などと云いつつ伸びをしている）

武藤 やっぱりさっきのあれで、通信がいかれちゃったのかなあ…。まずいよなあ。ね  
え雫さん、ちよつと呼んでみて下さいよ。

雫 武藤ちゃん、武藤ちゃん、ちよつと、ちよつと、

武藤 はい、はい、はい。

零 ニジ、ニジ、  
 武藤 え、なに、どじ、  
 零 いや、こじ、こじ、こじ、こじの、(首筋辺りを差し出す)  
 武藤 どじ、どじ、どじ、(首筋を指で押さえる)  
 零 あ、あいいいいいい、そじ、そ、じ、  
 武藤 いや、そうでなく！ そんな場合じゃないでしょ！  
 零 なんかに耳鳴りするわ、あたし。あんただいじよぶ？  
 武藤 うーん、なんかちよつとキーンとするような…いや、そうじゃなくてね…  
 零 なんかに空気悪くない？ ちよつと窓明けていい？  
 武藤 ああ、そうですね、ちよつと換気…イヤ、だめ、だめです！ (必死で零の手を押さえる。宇宙船に似合わずサッシのような窓らしい)  
 零 なんですよ、ちよつと外の空気入れましようよ。  
 武藤 いや、だめだつてば。ね。外、空気無いでしょ。宇宙っしょ。  
 零 難しいこと云わないで。  
 武藤 難しいこと。凄く簡単。窓ダメ。窓はやめましよう。  
 零 (全然話を聞いてない) ああああくたびれた…  
 零、長々と床に寝そべる。  
 武藤 寝ない寝ない。零さん。ちよつと。だからね、聞いて下さいよ。  
 零 (寝ツ転がったまま、床から) 聞いているわよ。しゃべりなさいよ。  
 武藤 …えーだから、通信がですねえ…えー、なんかしゃべり難いなあ…  
 零 じれつたいわね、早くしゃべんなさいよ。  
 武藤 なんか……あのですね、通信がですね、(武藤一緒に寝そべる)…ああ、これでいいや。おかしいんですよね。いくら呼んでも応えないんですよ。  
 零 あんたも真面目よねえ。  
 武藤 別に真面目ってわけじゃないですよ。いちおう通信員だし。  
 零 通信員たって別に本職じゃあるまいし。只のシアアのオブションでしょ。じつじ遊びみたいなもんじゃないの。  
 武藤 そうですけどね…  
 零 ほつとけばいいじゃないの。  
 武藤 そうはいかないでしょ、地球と通信できなくなったら困るじゃないですか。  
 零 なにが困るのよ。  
 武藤 なにがって、そりゃ、いろいろ…もしかして帰れなくなったり。  
 零 あんた帰りたいの？  
 武藤 …。  
 零 地球に帰りたいの？  
 武藤 …え。いや…。  
 零 悪いこと聞いちゃったかしら？  
 武藤 いや、別に…。  
 零 ねえ、知ってる？  
 武藤 はい？  
 零 ウワサ。  
 武藤 ウワサ？ なんの？

零 このツアーの噂。  
 武藤 知らない。  
 零 あのね、隠れ蓑なんだってよ。  
 武藤 隠れ蓑？  
 零 そ。隠れ蓑。  
 武藤 どういうこと？  
 零 ツアーって云うのは名ばかりの、姥捨て山ってこと。  
 武藤 姥捨て山？  
 零 口減らしよ。ようはさ、あたしたち、地球にとって好ましくない人間ってことよ。  
 武藤 …。  
 零 たとえば犯罪者、亡命者、危険思想の持ち主、そういう危険人物ばかり選んで八十八隻の宇宙船に乗せて、宇宙の果てに追い出す、それがこの恒星間飛行ツアーの裏の目的なんだって噂。  
 武藤 だって、自分で申し込んだわけだし…。  
 零 あらそう？ ホントにそうだった？  
 武藤 …。  
 零 このたびあなたは恒星間宇宙船完成百周年記念特別キャンペーンの特別抽選で特別に選ばれましたっていう特別なダイレクトメールが来たんでしょ？  
 武藤 あ、零さんも…  
 零 だからね、この船に乗ってるのは、みんな一癖も二癖もある連中だったってこと。でもツアーでしょ？ 天の川の端まで行って、銀河系を外から眺めて帰ってくるって云う…  
 零 あんた、ほんとに帰れると思ってる？  
 武藤 …。  
 零 MCつてさ、あたしたちのこと監視するためにいるんだと思わない？  
 武藤 監視？  
 零 そう。そして宇宙の果てにたどり着いたら、監視者から処刑人に早変わりってことになるかもよ。  
 武藤 処刑？ ど、どうやって…  
 零 この宇宙船の中央に、開かずの倉庫があるんだって、知ってる？ 中央倉庫っていうんだけど、そこには誰も入れないの。  
 武藤 なにが入ってるんですか？  
 零 さあ…もしかしてそこにこの宇宙船を粉々にするくらいの爆薬が仕掛けてあって、スイッチオンでドッカーン…  
 武藤 じよ、冗談…  
 零 じゃあなんであたしたち以外の、本職の乗組員がひとりもないの？ いくら実験が売りのツアーでも、普通こんなものってある？ 唯一客じゃないのがMC。コンピュータはプログラムされた通りに動くのよ。感情も同情もなく…  
 武藤 ちよつと待ってくださいよ。だって、そういう零さんも乗ってるじゃないですか。別にあたしは地球に未練なんかないわ。  
 武藤 …零さん、なにをしたんですか？  
 零 なにって？  
 武藤 地球に未練がないって、なんか、やばいことでも…

雫 結婚詐欺。

武藤 は。

雫 何億と稼いだわよ。

武藤 何億…。(シロシロと雫の顔を見る)

雫 なによ。なんか失礼な視線じゃないの。あのね、教えとくけどね、結婚詐欺って云うのは容姿じゃないのよ。

武藤 容姿じゃなくてなんなの？

雫 ハート。それと演技力。ま、あたしの場合、特殊技術もあるけどね。

武藤 特殊技術？

雫 そ。催眠術。

武藤 催眠術？ 催眠術で惚れさせるわけですか？

雫 それもあるけど、でもそんなのは長続きしないわ。それより、相手の本当の好みや、深いところに埋もれた記憶なんかを探り出すのに使うの。

武藤 そんなことしてどうするんですか。

雫 そういうのがもの凄く役に立つのよ。相手を虜にするのに。

武藤 はあ…。

雫 あんたにもかけてあげようか。

武藤 え。

雫 あんただってどうせスネに傷持ってるんですよ。地球にいられないわけがあるんですよ。隠したってダメ。そうでなきゃこんなツアーに参加するわけないんだから。

武藤 いや、ちょっと待ってくださいよ。僕はなんにも…そんなことは。

雫 そうお、だったら別に怖がなくてもいいでしょ。ちょっと遊んでみない？

武藤 いやいやいや、僕、好みちよつと変わってるし、幼児体験でいろいろ複雑な…あの…悲しい思いもいっぱいしてるし…

雫 ほおら、だんだん眠くなってきた…

武藤 あ、眠くないデス。ぜんぜん眠くないなあ…ラララ〜

雫 往生際の悪い。おとなしくしなさい。

武藤 あ、ちよつと、あ、の、ほ、

雫 …。

武藤 …。

もつれ合う形になる二人。

突如としてムーディな音楽が流れる。

見つめ合う二人。

MC、登場

MC あー、ゴホン、ゴホン。

武藤 うわあうっ。

飛び離れる二人。

MC おはようございます。

雫 え、MC、あ、あの、これは、違うの。あのね、えー、ちよつと、ノミ、ノミがいたのね、この人、風呂嫌いだし。

武藤 あ、そう、あの、ノミが。あ、痒い、痒いなああ。

零 そいでもって、そのノミが世界に七匹しかいないというそれは珍しいノミだった  
りして、それでこう、つい夢中になって探していたりして

武藤 そ、そう、その珍しいノミがなんと二匹も元気溼刺にこう、あっちへ跳ねこっち  
へ飛び…

M C 宇宙船にノミはいません。

零 あれ、そう？ あ、いないの？へえー、こりゃあ、こりゃあいいことを聞いた。  
うん。いいことを聞いたわい。はっはっはっ。

武藤 はっはっはっ、ゴホゴホゴホ。(咳きこむ)

M C まあ、いいんですけどね。別に宇宙船でそういう関係になっていけないという規  
則があるわけじゃないですから。

零 だから違うって云ってるでしょ！…だいたいあなたがバカ正直にあたしの作り話  
にリアクションするから調子に乗っちゃたんじゃないのさ。

武藤 作り話…？ だったんですか？

零 当たり前じゃないの。

武藤 はあ…(ため息)まいったな、零さん口つまいんだもの。本気にしちゃったよ…。  
さすが何億も稼ぐだけのことはありますね。

零 聞いてたの？

M C 私はこの部屋で起こることは全部把握しています。

武藤 やっぱり監視人…？

零 やり過ぎじゃないの？ プライバシーの侵害じゃない。

M C あなたのおっしゃる通り、私は感情のないコンピュータですから、まあテー  
プレコーダーが常に録音状態になるとでも考えてください。

零 別に悪気があって云ったんじゃないのよ。

M C わかっていますよ。…それにしてもお二人ともやけに早起きですね。

零 それがね。なんだか地球と通信不能らしいの。

M C …。

M C、マイクをとって調べる。計器を眺め、あちこちをチェックする。

M C (しばしあらぬ方を眺める体)ふうん。

零 なんなの？

M C どうも少しトラブルがあったようですね。操舵室のM Cと連絡が取れません。

零 M C同士って、テレパシーでもあんの？

M C そんなところですよ。というより、全部でひとつのものなんです。普段はそれぞれ  
独立して機能してますが、根っ子は繋がってます。

零 ふうん。

M C ええと、地球から最後に連絡があったのは…。

零 いつだったけ？

武藤 …ん…？

零 なによ、なんかポーツとしてるわね。

武藤 いや…。別に…。

M C 昨日の朝でしたね。…とにかく通信回路を見てみましょう。

M C、二人に背を向け、壁際で作業を始める。



零 やれやれ、なんだかすつかり目が覚めちゃった。

武藤 最後の…連絡…

零 ん？

武藤 …ヤメロ…

零 武藤くん、どうしたの？

武藤 …。

零 武藤くん？

武藤 おおおおおお…！

武藤、MCに襲いかかる。  
MC、不意を衝かれて、頭部に衝撃を受けて倒れる。

零 武藤くん！ なにするの！

武藤 …来る…もつすぐ…来る…怖い…怖い…怖い…

零 武藤くん！ 武藤くんてば！

武藤 …やめる…やめるおつ…いやだ…いやだ…いやだ…いやだ…追いかけてくる…呑み込まれる…逃げなくちゃ…逃げるんだ…

零 武藤くんてば！

武藤、狂ったように走り去る。退場。

零 ちょっと待って！ 武藤くん！

零、追って退場。

## 管制室／牛鮭／ザ・スタッフス シーン6

管制室。

室長・加藤と通信員・佐藤が並んで計器を睨んでいる。

佐藤は計器盤をあれこれいじっているような仕草。

佐藤　こちら地球。こちら地球。「こぎつね」応答願います。こちら地球、こちら地球、管制室。「こぎつね」応答願います…。

佐藤、計器をあちこちいじりながら呼び掛けるが、応答がない。

佐藤　…室長！ やはり送信回線が使用不能です。

加藤　…ていうか今度さ、吉野屋で牛鮭定食って云うの始めたんだよね。俺なんかさ、「ぎゅっじゃけ」ってだけでも云いにくいのね、それが三人前だったりするともう、俺なんかさ、絶対もう絶対「ぎゅっじゃけしゃんちょう」なんて云っちゃたりするわけ。これはもう絶対云っちゃったりするわけ。ああ云うな絶対云うな云うたらヤダなって思っただけビクビクしてると決まって三人来るわけ如何にも牛鮭な顔して三人来るわけ、それでももうこれは云っちゃうな云っちゃうなって思っただけ俺なんかね、いつもそう思ってるんだよね、でもまだ云ったことないんだね。

佐藤　室長、なに云ってんですか…。

加藤　激しく瞬きしながら早口でしゃべる吉野屋の店員の真似。

佐藤　そんなことをしている場合じゃありませんよ加藤さん！

加藤　わかつているぞ佐藤くん！

佐藤　「こぎつね」への送信が不能です。

加藤　なんだと！ それはいつからで原因はなんだ！

佐藤　合理的な合いの手をありがとございます。三十分程前、突然、武藤通信員からの呼びかけを受信しました。ところがこちらが幾ら応えても、向こうには聞こえていないようでした。それ以来、こちらからのエマーゼンシーコールにも応えがありません。原因は不明です。

加藤　つまりどういふことだ。

佐藤　つまり向こうからの電波は受信できるんですが、こちらからの送信が不能であるということですよ。

加藤　こっちの通信装置に異常は？

佐藤　ありません。こちらのシステムはすべて正常に動いています。

加藤　こっちの故障じゃない、と云うことは…

佐藤　明らかに「こぎつね」側のトラブルです。

加藤　通信が一方通行ということか。  
佐藤　はい。

加藤　まずいな。ツアーの客はある程度訓練を受けたとは云え、素人に毛が生えたようなもんだ。ほっとくとどんな事故が起こるかかわからん。とにかく通信手段を復旧させないと…。なんとか連絡はとれんのか。

佐藤　向こうのトラブルである以上、手も足もありません。

加藤　打つ手なしってこと？

佐藤　どうします。

加藤 …。  
 佐藤 室長。  
 加藤 ていうか、レタペババーガーって云うのもかなり云いにくいと思っのね、あたし  
 なんかバイトだけど猫舌だし、鳩胸だし、そんなでもって勇み足だし、  
 佐藤 室長、現実逃避はやめてください。  
 加藤 わかっているぞ佐藤くん！  
 佐藤 どうします？  
 加藤 全スタッフに召集をかける。  
 佐藤 おーい！ みんな集合ー！

隣の部屋から、宇宙船技師・鼎 心理学者・工藤が登場。

二人 はい！

佐藤 かけました。

加藤 はやいな。

佐藤 だって隣の部屋ですもん。

鼎 おはようございます。宇宙船技師の鼎です！

加藤 …しかもつけからハイテンションだし。

工藤 ハローハロー皆さん、心理学の使者・工藤です。今日も一日頑張っていきましょー！

加藤 こいつなんか、既にヤケになってないか？

佐藤 これでも能力はあるんです。

鼎・工藤 イエイエイ、イエイイ！

佐藤 私、もう一度通信装置を調べてきます。じゃ、あとはよろしく。

鼎・工藤 イエイイ！

佐藤、退場。

加藤 わかったわかった！ えー諸君！ 不測の事態が起こった。こぎつねに事故が発  
 生、通信不能だ。

鼎 えー、うっそオ。

加藤 嘘でないッ！ 事故の詳細は不明。こぎつね側の通信装置にトラブルがあったと  
 思われる。こちらからの連絡手段がない。至急対策を立ててくれ。

鼎・工藤 …。

加藤 …。なに？

鼎 は？

加藤 …。なんだよ。至急対策を立ててくれってんだよ。…ボーツとすんなよ。

工藤 対策ってなんの？

加藤 寝てんのかオマエは！ だから通信連絡が取れないから、それは困るからなんと  
 かして…なんとかしろよ！

鼎 だって宇宙船の方が事故ってんでしょ？

加藤 そうだよ。

鼎 じゃダメよね。

工藤 ダメ。

鼎 ダメ。

加藤 ダメダメって、オマエら諦め早過ぎるぞ！ 専門家だろ！ そこをなんとかしろよ！

鼎 専門家だからこそダメなもんはダメ。

工藤 ダメ。ノー・グッド。

加藤 簡単に云うな！ ツアーが発発して半年間、無事故で過ごしてきたのに、ここで万一のことがあつたら責任問題になるんだぞ。

工藤 もともと、ちよつと講習を受けただけの素人を、客だけで宇宙に送り出そうって云うのが間違いなんですよ。はつきり云って手抜きですよ。

鼎 一寸先は闇なんですから、宇宙は。

加藤 そのままやないかい。

鼎 自分たちの手で宇宙船を操り、星々を駆け巡る。ときめきの浪漫飛行。

工藤 宣伝の割に、客来ませんでしたね。

加藤 そうなの。今回のだつて全部で十一人よ。五人乗りの船に、たつた十一人。

鼎 八十八隻のなかで、飛んでるの「こぎつね」だけですもんね。

加藤 そ。「カメレオン」も「からす」も「ペガサス」も、みんな現役なのに…

鼎 しかも乗ってるのは観光客だけ。

工藤 ま、宇宙船はオートマで、オブザーバーの人間型コンピューターがついてるから、それでも飛びますけどね。

加藤 あ、MC。

鼎 はい？

加藤 「こぎつね」の各部屋には、一台つつMCが…

工藤 四台の人間型コンピューターが、船内の状況をモニターしてますね。

加藤 そうだ。事故だと判れば、MCが対処するはず。こんな時のためにMCが配備されてるんじゃないか。よし、MCを呼び出せ。事故の原因を究明させるんだ。

工藤 だから、こつちから連絡できないんですよに…

加藤 あ、そうか。するって…

工藤 結局MCが異常を感知して、通信を回復させるのを待つしかないわけです。

鼎 もしMCの手に負えないような事故だったら？

工藤 大概のことはMCで大丈夫だと思っただけねえ。

加藤 もし手に負えなかつたらこつちから連絡して来るんじゃないか？

鼎 連絡して来たつて、こつちから指示が出せるわけじゃないんですよ？ だから所詮どうしようもないのよ。

加藤 …っーん。

佐藤、戻ってくる。

佐藤 室長！

加藤 どうした。

佐藤 状況が少し判明しました。

加藤 通信回復したか！

佐藤 いえ。それは相変わらずですが…。実は通信不能になる前、つまり武藤通信員からの連絡の前に、「こぎつね」から発信があつたよつて、それが自動記録されていたんです。

加藤 事故発生前の通信か。

佐藤 ええ。微弱な電波なんです。解析可能です。まずこれを聞いて下さい。

加藤、計器を操作する。音声モニタから声が流れる。

スピーカーの声 …… えー…こちら…舵室…全艦乗員へ…… だいま操舵室にて警報…  
…は究明中…… ださい…… 判った？……

佐藤 これが「こぎつね」からの最初の受信です。音紋解析の結果、操舵室の霞副航海長と判明しました。

加藤 艦内放送じゃないか。

佐藤 恐らくマイクのスイッチ操作を間違えて、外部発信になってしまったんでしょう。しかしこれが幸いしました。ある程度状況が判るわけですから。

鼎 警報発令って云ったわね。

佐藤 そしてこれがその直後です。(計器を操作)

スピーカーの声 ……こちらリーダー室、こちらリーダー室、操舵室応答願います…

佐藤 (止めて) これまた操作ミスでしょう。このリーダー室からの声は操舵室には届かなかったと思われ。 (操作)

スピーカーの声 ……こちら操舵室…… 警報は小物体群…… 右舷後方より急速接近中…… 数、多数…… (声が変わる)…… 隕石？ (声変わる) 右舷って云ったわよね。(声変) なにも映ってないわ。(声変) おかしいわね…。

佐藤 このあたり、スイッチが入ればなしたのだと思われ。

スピーカーの声 なに、どうしたの？ (声変) あ、後藤さん！ たいへん… (声変)… 左に曲がります。揺れますのでご注意ください… (声変) はあ…？ おうあ…！ (ズツツツ) 転倒音)…… おわあ…！…

佐藤 コケたのだと思われ。

加藤 ……アホや。

スピーカーの声 ……左折してる……手動に切り替わってるわ……と云うことは…… 茜さんの運転よ！……いきなりなんだよ！……どうなってんだよ、え！……むおほっ！……

佐藤 このあたり、馬鹿馬鹿しいので飛ばします。(操作)

スピーカーの声 ……室より全艦乗員へ……群は通過……繰り返します……隕石群は本艦を通過……

佐藤 ここからです。よく聞いてください。

スピーカーの声 とりあえず無事だったみたいだな……おまえはまあだそんなカッコしてる…… 須藤さん、もうお昼です…… まま…… 今、大変だったんですよ…… ねえか…… どうすんだよ、計画は…… どうって？…… なんか、ケチついた感じじゃねえか…… ン、続行…… 続行っておまえ、ならそのカッコなんかかきさるよ！…… 計画って、なに？…… なんの話？…… あと五秒…… (遠い爆音。一瞬、猛烈なノイズ。ブツリと途切れる)

佐藤 このあとしばらくして、武藤通信員からの呼び出しがあったわけです。

加藤 ……

佐藤 どう思います？

加藤 うーむ。やな感じ。

佐藤 ですよ。

工藤 これでいくつかが判りましたね。

加藤 ほう。して、いくつかがその1は。

工藤 合理的な合いの手をどうも。まず「こぎつね」は隕石群に遭遇、手動に切り替えて回避行動をとった。そして無事回避成功したと思ったところ…

佐藤 はぐれ隕石に接触して破損したわけか。

工藤 そうと決めつけるのは早いでしょう。というより、「こぎまでの」ところでも腑に落ちない点がいくつかあります。

加藤 して、腑に落ちない点その1は。

佐藤 合いの手係か、あんたは。

工藤 まずメインレーダーがなぜ隕石群を感知しなかったのか。

鼎 そして、なぜこの状況を武藤通信員は知らなかったのか。

工藤 そう。通信室でもこの艦内放送を聞いていたはず。それならその時点ですぐに連絡してきてもおかしくないでしょう

佐藤 連絡してきたじゃないか。

工藤 それは事故のあとでしょう。隕石群発見の時点では、通信室からの報告はなかった。そして最もおかしいのは、レーダー室の会話です。

工藤、計器を操作する。

スピーカーの声 ……どうすんだよ、計画は。……どうって？……なんか、ケチついた感じじゃねえか。……ん、続行。……続行っておまえ、ならそのカッコなんとかしろよ！……計画って、なに？ なんの話？……あと五秒。……(爆音)

工藤 須藤観測員と後藤副観測長の、この会話。まるで事故を予め知っているみたいだ。もしそうなら、事故の原因は隕石の衝突ではあり得ない。

鼎 計画ってなんのことかしら……？

工藤 判らない。……佐藤さん、僕、ツアー参加者のプロフィールをあたってみます。

佐藤 頼む。ええと、鼎くんは……

鼎 こっちの通信装置、受信効力がもう少し上がんないか、いじってみるわ。

佐藤 耳を澄ませておくわけだな。オッケー、よろしく。

工藤・鼎 了解。

工藤、鼎、退場。

佐藤 いったい「こぎつね」でなにが起こっているのか。室長。なにか、嫌な予感がしますね……

加藤 ……ていうか、この台本書いてるうちにレタペーパーも終わっちゃって、今度ハグリルビープバーガーって云うの出ただけで、ネタになんないし、疲れたし、眠いし、来週合宿だし……

佐藤 誰なんだ、おまえは……

佐藤、加藤、退場。

## 攻撃センター／ジヨギングマン／シスターズ シーン7

攻撃センター。攻撃隊長・栞と料理長・江藤、登場。  
栞はオデコに絆創膏を貼っている。

江藤 カエル。

栞 ルビー。

江藤 イーグル。

栞 ルーペ。

江藤 ペンシル。

栞 留守。

江藤 スリル。

栞 …… ルンバ。

江藤 バイブル。

栞 …… ルート。

江藤 トータル。

栞 …… ループ。

江藤 プール。

栞 …… ルーズ。

江藤 ずる。

栞 …… 卑怯者ッ。

江藤 なにが。

栞 あんたね、いい加減にしなさいよ。

江藤 なにがよ。

栞 そんなにまでして勝ちたい？

江藤 いや、別に…。

栞 少しは人の和というものを考えなさいよね。

江藤 はい。

栞 …… 類推。

江藤 意地悪。

栞 ……

江藤 降参？

栞 …… 類似。

江藤 ジャングル。

栞 …… それどういう意味？

江藤 ジャングル知らんのか。

栞 日本語で言うと、なに？

江藤 日本語でいうと、まあ、森？

栞 リンゴ。

江藤 いや、ちょっと待って待って。ジャングルだよ。ル。

栞 森でいいわよ。日本人だから気取らずに日本語でいきましょうよ。

江藤 だってあんた類似って言ったでしょ。類似のジでしょ。だからジャングル…

栞 モでいいわよ。許す。モにしましょう。

江藤 いや、だからね…。

朶 モがいい。

江藤 モがいいの？

朶 モが。(甘える)

江藤 じゃあ、モデル。

朶 …。(スタスタと去る)

江藤 あ、ちよつと。隊長！ 攻撃隊長！…どこいくの！

朶 (手を挙げつつスタスタと来る) ルーズリーフ。

江藤 どこ行つてたの、あんた。

朶 ルーズリーフ。

江藤 フットボール。

朶 …。

江藤 …。

朶 …。

江藤 ビル。

朶 ルービツクキューブ。

江藤 ブライダル。

朶 ルームサービス。

江藤 スコール。

朶 ルームクーラー。

江藤 アイドル。

朶 ルームランナー。

江藤 アクリル。

朶 ルーム…

江藤 …。

朶 ルーム…

江藤 なんだ？

朶 …ルーム。

江藤 ムニエル。

朶 …。(ガックリと膝をつく)

江藤 …。降参？

朶 …つままないわ。

江藤 は？

朶 退屈よ。あたしは攻撃隊長なのよ！ なにが悲しゅうて窓際でシリトリなんかしてなきゃなんないの。

江藤 あんたが云い出したんですよ。

朶 ああ、攻撃したいわ。ミサイル撃ちたい。ビーム出したい。

江藤 無茶云うな。そんなこと云つたらオレだつて料理長なんだよ。料理したいよ。ええ？ 煮たいよ。炒めたいよ。盛りつけたいよ。

朶 勝手に盛りつけてればいいじゃないの。

江藤 どうやって？ なにを？ 全部出てくるじゃない。全部機械がやってくれちゃつてさ。しかも文句無しに旨いとくるとるじゃん。やりきれないよ、まったく。



朶 だいたいあんた、料理長のくせになんでこんなところにいるのよ。ここは攻撃センターよ。攻撃すんのよ。やっちゃおうわよ。

江藤 しょうがないでしょ。希望出したらこうなったの。まさか厨房のない船だとは思わなかったなあ…。

朶 もういい。もう我慢できない。

江藤 なに。

朶 攻撃用ー意！

江藤 おい、ちよつと！

朶 ミサイル装填、発射準備！ 目標、そこらへんの星！

江藤 こら！ お待ちなさいつて！

朶 いいじゃないのイッパツくらい…。

江藤 ダメに決まってるだろ！

朶 じゃあさ、イッパツだけ弾込めてさ、くるくる回して撃ってみるとか、ロシアン

ルーレットみたいな………あッ！（キラキラと輝く瞳）…ルーレット！

江藤 トーテムポール。

朶 ……。ビーム砲用ー意！ 一斉発射！ 敵を蜂の巣だ！

江藤 するなつて云つての！ 敵って誰だ！

副隊長・伊藤、ジョギング姿で登場。

伊藤 ビーム砲発射準備完了。

江藤 こら！ 伊藤！ 本気にすんな！

朶 すぐ発射。もう発射。見切り発射。

伊藤 了解。

江藤 待てつてば！

伊藤 隊長。発射装置のキーを。

朶 なにが。

伊藤 発射装置はキーロックされています…それがないと撃てません。

朶 ああ、これ。はい。（首から下げたキーを渡す）

江藤 渡すなつて。

伊藤 ……。

朶 なによ、さっさとしなさいよ。

伊藤 あの、もうひとつ。

朶 なにがよ。

伊藤 いや、あのですね、キーがもうひとつ、こつ（手振り）…二本要るんです。

朶 まだるっこしいわね。ホレ、早く！

江藤 俺が持つてるわけないだろ。

朶 なんでもいいいわよ、自転車の鍵でもなんでも。

江藤 アホか。

伊藤 もう一本はMCが持ってます。

朶 知ってるんなら早く云いなさいよ。MCはどこ！

伊藤 ……先ほどミサイル保管室に点検に。

朶 ゴー！ レッツゴー！

伊藤 はッ。攻撃センター副隊長・伊藤、ミサイル保管室まで、ジョギングがてらキーを取りに行つて参ります！

伊藤、張り切つて退場。

江藤 最初からそのつもりだったんだな、あれは。

朶 暇さえあればジョギングしてんのよ。

江藤 それにしても、おい、いいのかビームなんか撃つて。

朶 一発くらいいいじゃないの、固いこと云わないの。

江藤 まあ、MCが許可するとも思えないけど…。

朶 その時は力づくでも奪う。

江藤 やれやれ。

茜、袖からひょっこり顔だけ出す。

江藤 …。

朶 なに？

江藤 あれ。

茜 …。(キョロキョロと部屋を見回して引っこ込む)

朶、江藤、そばに寄っていく。

茜、再び顔を出す。

朶と目が合う。

朶 なにしてんの。

茜 …!! シーッ!

朶 は？

茜 …。(もの凄い囁き声) えむしー、は？

朶 はい？

茜 …え、む、しー、は？

朶 今いないけど。

茜、奥に合図する。茜に続き、霞、望、ソロソロと登場。

江藤 なんなんだ。

望 こんにちわー。さすらいの操舵室シスターズでございます。

霞 お邪魔します。

茜 (キョロキョロ室内を見回しながら) MCは？

朶 なんなのよ。

茜 考えてみたら、各部屋に一人づついるのよね、あのアンドロメダは…。見つかる

と面倒なのよ。どこ行ったの？

朶 ミサイル保管庫。

茜 へえ、そんなのあるんだ。広い？

朶 ジョギングできる。

茜 いいわねえ変化があつて。あんた憑いてるわ。

江藤 知り合い？

朶 腐れ縁。

茜 航海長の茜です。朶とは一緒にツアーの申し込みしたの。

江藤 料理長の江藤です。どうも。

霞 副長の霞です。よろしく。

望 航海士の望です。初めまして。

江藤 あ、どうもどうも。

朶 あんたさっきの運転なによ。あんたでしょ、あれ。

茜 ああ、うん。

朶 絶対そうだと思ってたわよ。これ見てよこれ。(絆創膏)

茜 それくらいいいじゃないの。あたしのスーパードライビングテクニックのおかげで助かったのよ。感謝してもらいたいわね。

朶 結局ぶつかったんでしょうが。

茜 ぶつかってないわよ！

朶 だいたいあんた昔からポコポコポコぶつけてたのよ。

茜 ぶつけてないわよあ！

朶 ポスト倒したでしょ。

茜 …ああ。

朶 パーキングメーター倒したでしょ。

茜 あー。

朶 そのあとパトカーに追っかけられながら交通標識二本倒して、最後に電信柱薙ぎ倒したでしょ。

茜 懐かしいわね…。

朶 遠い目してんじゃないわよ。

霞 …レディース？

江藤 なんて生きてるんだろう…。

望 さすが不死身を名乗るだけのことはあるわね…。

朶 だいたいアンタ、こんなところまでなににきたのよ。部屋から出ちゃっていいの？

茜 探検よ探検。宇宙船の謎に迫るのよ。

朶 謎ってなんのことよ。あんたの云うことって、昔っから全然わかんないのよ。

霞 実は、ここへ来るまでに話してたんですけど、あの、さっきの隕石騒ぎのことです…

江藤 ああ、艦内放送聞いてた。

霞 あら嘘、嫌だ、まあ恥ずかしいわ。あれ聞こえてたんですか？

江藤 そりゃ全艦放送だから。

霞 まあ恥ずかしいわ、変でした？ あたしの声どうでした？ マイクだと変でしょ？ (咳払いで遮る) それでね、あの直後に爆発があつて、ウチのMCがいかれちゃつて、それであたしたち出てこれたんですけど、どうもおかしいんです。

江藤 隕石じゃなかったってこと？

望 少なくとも操舵室のレーダーでは、隕石は全部通過してたわ。間違いありません。どうも話がよく判んないんだけど、そういう隕石やなんかはまずレーダー室のメインレーダーに引つかかるんじゃないの？ レーダー室からは、なにも云ってこなかったの？

霞 そうなんです。だからあたしたち、レーダー室にまず行って見たんです。

江藤 …。で？ 行ってみたら？

望 藻抜けの殻

江藤 は？

霞 いないんです、誰も。

江藤 誰も？ それどういふこと？

霞 さあ…。

茜 神隠しよ！

江藤 はあ？

茜 この宇宙船には、神隠しが、神隠しの、神様が、えーと…

栗 馬鹿。

茜 ば、馬鹿ア？

霞 (気色ばむ茜を抑えて)とにかくおかしなことが多くて…。

望 あの爆発にしても、もし隕石じゃないとしたら、なんだったのか…。

茜 その謎を突き止めるために、操舵室から遙々やってきたわけよ。

栗 ハルバルってあんた操縦どうなってんのよ。

茜 それがね…。

栗 なによ。

霞 舵が効かないんです。

栗 え。

望 部屋を出てくる時、オートに戻しておいたほうがいいと思って、いったん部屋に戻ったんです。ところが…。

茜 オートどころか、手動でもハンドル効かないし…まっすぐ進むだけ。

栗 操縦不能ってことじゃないの。

茜 その通り。

栗 …。

江藤 地球に連絡したほうがいいんじゃないかな。

霞 あの、地球との連絡って…

江藤 電波が特殊だから、通信室からしかできない。隊長。

栗 (マイクをとって)こちら攻撃センター、攻撃隊長・栗。通信室、通信室、応答願います。…出ないわよ。

茜 貸して。(栗からマイクをとる)…こちら航海長・茜。えー、原因不明の爆発で操舵室が一部破損。操縦不能です。その後リーダー室乗組員が集団神隠しに合うなど、難儀しております。至急、地球に連絡をとってください。通信室、通信室、応答願います…。

望 ノーリアクシオンね…。

霞 ねえ、もしかして通信室も…。

望 まさか…。

栗 通信室まで神隠しだって云うの？ なんてそんなにドンドン居なくなるのよ。

望 どういうことかしら。

茜 (マイクを諦めて)だめだめ。こっしてたって埒が明かないわ。行きましょ。

江藤 行くって？ どこいくの？

茜 どこって、決まってるでしょ。通信室に行って直接地球と連絡とるのよ。

望 そうね、それしかないかもしれない。

茜 あんたも行く？

栗 あんたと一緒に？ ご冗談でしょ。

茜 あっそ、じゃあね。ちよっと行ってくるわ。

霞 どうも、お邪魔しました。

望 お騒がせしました。なんか判ったら知らせますから。

栞 ちよ、ちよっと、待ちなさいよ。

茜 なによ。行きたくないんでしょ。じゃあね、大人しく留守番してなさい。

― 茜、霞、望、バタバタと退場。

栞 なにが留守番よ！ ちよっと！（江藤に）あっ、留守番！

江藤 …… いいの？

栞 …… 留守番：電話。

江藤 ワル。

栞 …… あたしも行くわよ！ ちよっと待ちなさいよ！

栞、三人を追って退場。

江藤、それをさらに追って退場。

## Shall We... / ニサイル管区 / 混沌

## シーン 8

宇宙船内。  
須藤、後藤、累、紬、登場。  
立ち止まってあたりを見回している。  
完全に迷っているようだ。

紬 どこなのよ、中央倉庫って。

須藤 ままま。

紬 ホントに判ってるんの？ さっきからグルグルおんなじところ歩いてるみたいだけど。

須藤 慌てないあわてない。(自信なぞげ)

後藤 おっかしいな。こっち、こっ曲がるだろ。そこでこの角を左だろ。ぐるっとまわって、ここを右だろ…。

須藤 ちよつと見せてみ。オマエ、地図の見方間違ってるんだよ。

後藤 そんなことないだろ。だってこっちが北だろ。だからこっただろ…。

須藤 おまえ…宇宙だよ。東西南北なんか全然関係ないだろ。

後藤 あ。

須藤 なんなんだよその手に持ってる磁石は。

後藤 う。

須藤 貸せ。いいから地図を貸せ。

紬 ……だいたいその倉庫って、なにが入ってるのよ。

累 さあ。

紬 さあって、知らないの？

累 知らない。

紬 知らないのに狙ってるの？

累 そう。だめ？

紬 だめってことないけど…。海賊ってそんなんでいいの？

後藤 ……だからここを右に曲がらないとダメなんだって。

須藤 だから判ってるよ、ここをこっ曲がるだろ、そこで

後藤・須藤 そんなでこの角を左だろ。ぐるっとまわって、ここを右だろ…。

累 ……あたし思うの、中央倉庫には、とても大事な…あたしたちにとって大事なものが入ってるんだって…。

紬 あたしたち…って？

累 あたしたち。あたしたち全部。この船に乗っている人たち全部よ。

紬 ……

累 なぜだか判らないけど、無性にそう思っの。だからこの計画を立てた。…それがなんだかは判らない。でも…そこに行かなきゃいけないって思っの。

紬 ……

後藤 だから、それがダメなんだよ。おまえのそこんこのステップがね…

須藤 だっここで、こうターンして、そいで、スロー、スロー、クイック…

後藤・須藤 スロー、スロー、スロー、クイック、クイック、スロー…

どういうわけか社交ダンスになっている二人に業を煮やして近づく紬。

紬 ……見せてよ。あたしが見るわ。

須藤 ……。(累を見る)

累 ……。(目で許可する)

紬 (須藤から地図を受け取る) この部屋ね？

須藤 そう。

紬 ずいぶん分厚い壁ね。それに、この四隅よすみの小部屋みたいな空間はなにかしら…。

後藤 この厚さ、壁にはいちばん頑丈な衝撃吸収材を使ってる。そして四隅のスペースは、恐らく抗重力装置…。

紬 抗重力装置？

後藤 宇宙船の揺れや遠心力を完全に打ち消してしまう装置だ。船がどんなに激しく揺れても、このなかならコップひとつ倒れない。音も衝撃も伝わらない。こいつは完全に隔離された倉庫だ。

須藤 それだけ貴重なものが入ってるって証拠。

紬 なが入ってるのか気にならない？

後藤 それは開けてのお楽しみさ。

累 わかる？ 紬ちゃん。

紬 ええと…まず今いるところが…ここだわ、きっと。

須藤 どこどこ？ あれ、ここオ？

後藤 現在位置からして全然違うじゃねーか！

累 (地図の文字を読む) ミサイル、保管庫…？

副長・伊藤、ジヨキングしながら登場。

一同 ……。

伊藤 ああ、どうも。

後藤 どーもー。

伊藤、ジヨキングしながら退場。

紬 あれ、なに？

累 さあ…。

後藤 とにかく地図、地図。

紬 ええと、今がミサイル保管庫だから、中央倉庫に行くには、まずここをまっすぐ、それからぐるっとまわってまたまっすぐ…

伊藤、ジヨキングしながら再登場。

一同 ……。

伊藤 どうもどうも…。あー、MC見ませんでした？

後藤 は？

伊藤 うちのMC見ませんでした？ 攻撃センターの…。あ、申し遅れました。攻撃センター副長の伊藤です。

後藤 ああ、ご丁寧ていねいにどうも。

伊藤 あの、そちらは。

後藤 あ、ああ、えー、レーダー室のほうから参りました。えーと、えー…レーダーズです。

伊藤 それはそれは、ずいぶん遠くのほうからよくいらっしやいました。

後藤 いやいやどうも。

伊藤 で、うちのほうのMC見かけませんでしたかねえ？

後藤 ……さあー、ちよつと…なあ？

累 ちよつと、ね。

伊藤 そうですか。おかしいな…。いやね、うちの隊長がビーム撃ちたいって云うんですから。

後藤 は？ ビーム？

伊藤 はい、ビーム。

須藤 ……伊藤…。

伊藤 ハイ？

須藤 おまえは、伊藤…。

伊藤 はあ。伊藤ですが。

須藤、隠していた銃を伊藤に向ける。

伊藤 うわ。

後藤 須藤、オイ、なにすんだ。

須藤 ……やっと見つけたぞ、伊藤。

伊藤 え？

須藤 ……久しぶりだな。

伊藤 いや…えーと

須藤 ……元気だったか。

伊藤 ……。

須藤 ……少し痩せたな。

後藤 友達？

須藤 友達…？ こいつが？ 冗談云うな。こいつはな、太陽を盗んだ男だ。

後藤 はあ？

累 太陽を盗んだ男？ (もの凄く小声で) ジュリー？

後藤 (もの凄く凄く小声で) 似てないね。

須藤 お前は俺から太陽を奪った。俺はそれ以来闇のなかを生きてきたんだ。宇宙海賊の養成所のオーディションを受けて研究生になり、アルバイトで生計を立てながら、高い月謝を払って、二年後に正規団員になった。最初は小さな役しか貰えなかった。先輩の銃を手入れしたり、先輩のユニフォームを洗濯したり、先輩のドクロを磨いたり…

伊藤 どんな先輩なんだ。

後藤 わかるなあ。(涙ぐむ)俺も…ドクロを、こつ…骨も、こつ…(磨く手付き)

須藤 そんな苦勞を耐えてこられたのも、伊藤！ お前が俺から奪っていったものを、忘れたい一心だったんだ。俺の、俺の、最愛の、女を。

後藤 お、女？

須藤 俺の太陽、俺のスイートなレイディ、俺の命から八十八番目に大事な…

後藤 待て待て待てイ！ 全然愛してたくない？



累 後ろから数えたほうが早いじゃないの！  
須藤 後ろから数えたら二万九千九百十二番目に大事な…  
後藤 少し整理しろよ！ 大事なものを！

累 気が多すぎるわよ！

須藤 ここで逢ったが百年目だ。伊藤、覚悟しろ…。

伊藤 ちよつと待て！

須藤 言い訳は聞きたくないね。

伊藤 待てつてば！ 言い訳もなにも、俺には全然…

須藤 覚えがないつて云うのか。まさかな。そんなすつとほけたことは云わないよな。  
伊藤 覚えがないんだけど。

須藤 ちよつと待てよ…。おまえなあ。そりやないっしょ。そおりやないっすよ。こつちがこんだけ根に持つてんだよ。おまえはだいたい昔から淡泊なヤツではあったけどな。それは、それはないでしょ。

伊藤 いや淡泊も腕白も、俺、あんたを知らないもの。

須藤 おまえ、いい加減にしろよ。

伊藤 いやいい加減もお湯加減も、知らないものは知らないもの。誰？

須藤 忘れたのかよ、俺を！ 嘘だろ？ 小学校のとき二人でピンポンダッシュで捕まっただじゃねえか。覚えてないのかよ？

伊藤 知らない。

須藤 中学のとき二人で万引きして捕まっただのは？ 高校のとき歌舞伎町のポン引きに捕まっただのは？

累 捕まっただばかり。

伊藤 あ。人違い。俺じゃない。俺、中卒だもの。高校行ってないから。

須藤 なにイ。

伊藤 だから人違いだつて…。

須藤 伊藤！

伊藤 はいはい。

須藤 やっぱ伊藤じゃねえか！ この野郎！

伊藤 わ。

後藤 須藤！ よせ！

須藤は伊藤に銃を向け直し、後藤は須藤を後ろから抑える。

須藤 放せ後藤！

後藤 やめろつて、こんなときに余計な騒ぎを起こすな！

伊藤、ふたりのもみ合いの隙をついて逃げる。退場。

須藤 待て！ 伊藤！

須藤、後藤を振りきり、追って退場。

後藤 おい！ 待て！…ボス！

累 追っかけるのよ！

累、追って退場。

後藤 えーい、あの馬鹿…。

後藤、追って退場。

紬 …。

紬、ひとりぼつんと残される。

M C、登場。

M C レーダー室の紬さん…ですね。

紬 攻撃センターのM Cね。

M C 困りますね、持ち場を離れてもらっては。このツアーの参加者は…

紬 ツアーの規則は承知してるわ。M C、あなた、操舵室付近で爆発があったこと、ご存じ？

M C もちろん。

紬 原因は？

M C 隕石と思われる小物体の接触ですよ。

紬 地球への連絡は？

M C 被害状況を調べてから報告します。

紬 誰が調べるの？

M C 操舵室のM Cが調査に当たる筈はずです。

紬 …。航海は順調にいつてるのかしら？

M C もちろんです。全ては正常ですよ。安心してツアーを楽しんでください。

紬 …。そつ。ありがとうございます。

M C どうぞ、部屋へお戻りください。

紬 そうね。(行きかける)…ねえ、M C。

M C はい？

紬 どうしてレーダー室にはM Cがいないのかしら？

M C …。

紬 答えられないの？

M C …。

紬 珍しいこともあるのね。この船のことであたが知らないことがあるなんて。

M C …。

紬 それじゃ。

紬、去らうとする。

M C、紬の行く手を塞ぐ。

紬 なによ。

M C …。どつやらあなたをこのまま帰す訳にはいかないようですわね。

紬 …。

M C、身をかわそつとする紬の腕をつかむ。  
じつと紬を見るM C。にらみ返す紬。

暗転。

## 管制室ノプロフィールノ指令 シーン9

管制室。室長・加藤がひとり行む。たまたま

加藤 あつぶねー…楽屋で寝ちゃったよ。

佐藤、登場。

佐藤 室長！

加藤 どうした。

佐藤 「こぎつね」から新たに微弱な電波を受信。解析しました。

加藤 内容は？

佐藤 それが…。

加藤 なに。もったいぶるなよ。早く聞かせて。

佐藤、操作する。

スピーカーの声 (雑音)…攻撃用ー意！

加藤 ななな何イ！

佐藤 声は攻撃隊長。攻撃センターの室内放送です。

スピーカーの声 (雑音)…トータムポール(雑音)…ビーム砲用ー意…(雑音)蜂の巣だ！(雑音)伊藤！本気にすんな！…すぐ発射。もう発射。見切り発射…

(雑音。プツリと途切れる)

加藤 トータムポール？ そんなもん撃つてどうすんだ！

佐藤 なんて宇宙にそんなもんがあるんですか。

加藤 新しい部族でも発見したのか。

佐藤 そんな訳ないでしょ。

加藤 どうなってるんだよ！

鼎、登場。

鼎 どう？ だいぶ感度上がったでしょ？

佐藤 上がった。目茶目茶上がった。

鼎 よっしゃあ。

加藤 よくない！ よくないぞう！

鼎 どしたの？

佐藤 「こぎつね」が攻撃準備してるらしい。攻撃センターの室内放送を受信した。

鼎 室内放送？ すっごおい。やっぱアタシって天才？ ね、天才？

加藤 それどころじゃない！ 工藤はどうした！

鼎 工藤くん、出番よー！

工藤、よれよれの恰好で登場。

工藤 いやあ、すっかり寝ちゃって…。

加藤 どいつもこいつも…。

佐藤 どうだった、ツアー客のプロフィール。

工藤 それが退屈で退屈で。みんなこれと云って特徴のない、フツウの人たちばかりですよ。読んで眠くなっちゃった。

佐藤 攻撃隊長のプロフィールは？

工藤 ああ、柔さんですね。あの人はO.L。性格は大人しくて引っ込み思案。

鼎 攻撃してるんですって。

工藤 攻撃？ なにを？

加藤 トーテムポール。

工藤 は？

突然、スピーカーに雑音が入る。

鼎 あれ。

加藤 なんだ、どうした。

佐藤 (計器を調べる) かなりノイズが激しいですが、通常のハイパーウェーブです。地球に向けて送っているんです。

工藤 どうして急に…

スピーカーの声 (雑音) 一人じゃないわよ！…(鈍い銃声)…危ない！…(ドタドタと足音)…ルンルンギャル！ (雑音、連続する銃声、雑音)

鼎 これ…銃声…？

佐藤 なんて宇宙船に…

加藤 ルンルンギャルが…

佐藤 それは置いといて。どうして銃声なんか！

スピーカーの声 (雑音) どうせ逃げられないわよ！ (雑音)…探したのよ、累…。お姉ちゃんのこと覚えてる？ (雑音)

鼎 お姉ちゃん？ 宇宙船に家族連れて乗ってる？

工藤 乗ってない。全員あかの他人同士。

加藤 なにが起こってるんだ、いったい…。

スピーカーの声 (雑音)…逃げて！…(雑音) 中央倉庫だ！ (雑音)…(激しい雑音) 一同、凍りついたように黙り込む。

鼎 …中央倉庫…。

工藤 今、確かに…。

佐藤 中央倉庫…。

加藤室長、ただことならぬ緊張感を漂わせ、ゆっくりと命令を下す。

加藤 …あらゆる手段を使って、「こぎつね」に送信を続ける。全種類の電波、すべての周波数でだ。

鼎・佐藤 はい。

工藤 送信内容は…

加藤 一言でいい。…ただ一言。中央倉庫を開けてはならない、…と。

三人、無言で散る。退場。

加藤、スクリーンを睨み据え、立ちつくす。暗転。

追ってくるもの／ラッシュシュ／銃爪ひきがね

## シーン10

宇宙船内。

武藤、走って登場。へたり込む。

零、追って登場。

零 …… 武藤くん……。

武藤 …… ああ……通信長……。

零 だいじょうぶ？

武藤 …… ええ……すみません……。

零 吃驚した。

武藤 ……。

零 ……。

零、武藤のそばに座る。

零 初めてよねえ、通信室から出たのって。

武藤 ……。

零 ねえ、武藤くん。

武藤 はい。

零 なにが追いかけてくるの？

武藤 ……。

零 悪いこと聞いちゃってるかな？

武藤 よく……覚えていないんです……でも、なんだか……さっき……まるで、自分が自分ではなくなってしまったような感じでした。記憶とか、過去とか、そういう自分を支えているものが全部、クルリと裏返って、全然見覚えのない他人の記憶が溢れ出てくるような……

零 他人の記憶？

武藤 顔のない誰か……。そいつが必死になって叫ぶんです。逃げろ、逃げるんだ、追いかけてくる……って。もの凄い恐怖の感情と一緒に。気がついたら、叫んでいるのは、僕自身でした。

零 (大きく息をつく) 不思議な話ね。……じゃあ、全然身に覚えはないの？ その……追いかけるような……。

武藤 残念だけど、僕はごく普通の、平凡な男ですよ。地球から追放されるような大物じゃない。通信長と違って……

零 やだな。あの話は冗談だってば。

武藤 たぶん僕は……零さんの催眠術にかかったんです。

零 まさか。

武藤 もしかして、催眠術も嘘？

零 催眠術はまるつきり嘘って訳じゃないわ。ちょっと凝ったことがあったの、通信講座でね。でも……

武藤 もしかして才能あるのかも……

零 そつお？

武藤 通信長、通信室から出たのが初めてだって云いましたね。

雫 え？ ええ。

武藤 … たぶん… 違う。

雫 違うって、なにが？

武藤 … 僕らは、きつと、一度、ここを歩いた。いや、きつと、何度も。曲がりくねった廊下を歩いて… そして…

雫 そして？

武藤 広いホール…。ドア…。そう、大きなドア…

雫 中央倉庫…

武藤 そこに、なにかがあるんだ…。なにか…

雫 … なんだか、怖いわね。

武藤 …。

武藤、手を差し延べる。

雫 …。

武藤 行くっ。

雫 行くって？

武藤 ここまで出てきたついでだ。行ってみましょう。中央倉庫へ。… 二人で。

雫 …。

武藤の手を取る。

武藤 … もう大丈夫。心配いりませんよ、通信長。

雫 … 雫って、呼んで。

武藤 … 雫さん。

突如としてムーディな音楽が流れる。

見つめ合う二人。

茜、霞、望、栞、江藤、登場。

茜 いやいやいやいや。

霞 どうもどうもどうもどうも。あ、お構いなく、どうぞそのまま。

武藤 うわおっ。

飛び離れる二人。

雫 なに、誰？

望 お邪魔いたします。さすらいの操舵室シスターズ、プラス<sup>アルファ</sup>、<sup>ベータ</sup>でございます。

栞 でございます。

江藤 そして私が でございます。

武藤 なんだなんだなんだ！

霞 遙々操舵室から、ときめきの香りに惹かれてやって参りました。

茜 あ、わたくし、これに目がないものでして…

武藤 どうでもいいけど狭いよ！

茜 狭いながらも楽しい我が家。広いながらも進めよ宇宙。怖いながらもと〜お〜りゃんせ〜

霞・茜 (ハモって) とおりゃんせ〜。

武藤 なんのことだかわからん。

茜・霞 同じく。

望 先ほどからその角に身を潜めお話を伺っていましたが  
武藤 のぞきじゃないか！

霞 聞けば通信室の方々とか。

茜 実は先刻操舵室にて不慮の事故、是非とも地球に連絡とってくださいんせ。  
武藤 地球とは通信不能なんだ。

茜 へ？

栞 通信不能って、どういふことよ。

武藤 連絡できないってこと。

伊藤、走って登場。

伊藤 まったく、なんなんだ、あの男は…うわ。あ、隊長！

栞 あなたなにやっつてんのこんなところで。鍵は？ MCはいたの？

伊藤 それがですね、レーダースのやつらに危うく…あ。

栞 あ？

伊藤 お…お…ま…し…し…

栞 おまし？…誰が？

伊藤 おまえは雫！

雫 …へ？

伊藤 やつと見つけたぞ、雫！

雫 え、あた、あたし？

伊藤 よくも騙してくれたな！

雫 あ、え、お？

伊藤 五年前おまえの結婚詐欺に引っかけた伊藤だ！ 忘れたとは云わせんぞ！ こ  
こで逢ったが百年目だ！ 覚悟しろ！

茜・望 ケツコン詐欺？

武藤 雫さん、やっぱり！

雫 ちが、あたしはそんなことしてないわよ！ あなた、言い掛かりはやめなさい  
よ！ あなたなんか見たことも聞いたこともないわよ！

伊藤 …怒った。

伊藤、雫に向かって突進。一同止めに入りもみ合う。  
須藤、登場。

須藤 伊藤！ もう逃がさんぞ！

武藤 あ、また増えた…。

須藤 覚悟しろ！

伊藤に銃を向ける須藤。  
それを見て、わらわらと逃げる一同。  
後藤、累、登場。

後藤 須藤！ よせ！

須藤、伊藤に近づき、銃口を顔に寄せる。

伊藤 …！

伊藤、須藤の手を銃ごと掴む。

須藤 放せ！

伊藤 人違いだつて…云つてんだよ！

銃声。  
望が銃を構えている。

望 全員手を挙げなさい。宇宙海賊団リーダーズ！（手帳を見せる）警察よ。  
茜・霞 えっ。

後藤・須藤・累…。

三人、呆気にとられた沈黙のあと、一斉に銃を望に向ける。  
望、慌てて物陰に隠れる。  
それを見て三人組も慌てて反対側の物陰に隠れる。

望 しつぽを出したわね！ ずっとあんたたちを追ってたんだから！  
後藤 こっちは三人だ！ たった一人で勝てると思つか！ 諦めろ！

朶、ズカズカと出てくる。銃を抜く。

朶 一人じゃないわよ！ 攻撃隊長に無断で攻撃していいと思つてんの！

朶、発砲。  
物陰から三人、応射。

江藤 危ない！

江藤、朶を引っ張り戻す。

江藤 …なに考えてんだ！ 危ないだろ！

朶 ルンルンギャル。

江藤 ルイスキャロル。

朶 …（半ば満足そうに頷く）。あたしは降参しない女なの。

望 ここは宇宙船のなか！ どうせ逃げられないわよ！

累 …わかつたわ！

須藤 ボス！

累 ここはあたしの云つとおりにして…今出て行くわ！

累、両手を挙げて出てくる。  
望は、用心して出ない。

累 どうしたの？ 降参してるのよ。出てきて捕まえなさいよ。

望 手下の二人も投降させ…

茜 …累…。

望 は？

茜 あんた、累でしょ…？

累 …そうだけど。

茜 やつと見つけた…

茜、累の前に出ていく。



望 ちよつと！ 危ないわよ！

茜 探したのよ、累…。お姉ちゃんのこと覚えてる？

望・霞・須藤・後藤 えっ。

望 お姉ちゃんて、あんた！

茜 あたしの妹よ。撃たせないわ。…あいたた。

累、茜を捕まえ、腕を後ろへ捻り上げる。

茜 ちよつと累…痛いわよ…あんた力強いわね…大きくなって（涙ぐむ）

後藤 ボス！

累 逃げて！…早く！

須藤 ボス！

累 いいから早く！

後藤、須藤、躊躇<sup>ためら</sup>うが、退場。

望 待ちなさい！…どこへ行くこつて云うの！

武藤 …中央倉庫だ…！

望 え？

朶 こら海賊娘！ その馬鹿放しなさい！ 馬鹿はうつるわよ。

累 近寄らないでっ。

累、ジリジリと下がる。

茜 …いい加減に、しなさい！

累 あいたたたたた！

茜、累を逆にねじ伏せる。

累の銃が床に落ちる。

朶がそれを蹴り、累に銃口を据える。

茜 まだまだお姉ちゃんには勝てないわよ。

累 あたしは一人っ子よ！

茜 なに云つてんのよあんた。

江藤 …伊藤！ なにする！

伊藤が蹴り飛ばされた銃を拾い、朶に背後から近寄り、背中に銃を当てている。

武藤 朶さん！

望 ちよつとあんた！

伊藤 あれが新しい獲物か。え？

朶 …人違い…よ…あたしは…

銃声。

全員が息を呑む。

凍りつく時間。

朶、すくと膝をつく。

伊藤、銃をだらりと下げる。

銃声を聞きつけて、後藤、須藤、戻ってくる。

須藤 …伊藤…おまえ…

伊藤 本気だったんだよ。おれは…おまえを…雪…

暗転。

## 今日は何日／十年は一昔／ホールへ シーン11

時間経過後。

一同、思い思いの姿で立ったり座ったりしている。

朶 どういうこと？

茜 こつちが聞きたいわ。

後藤 俺も聞きたいよ。

伊藤 あの…ホントに朶じゃ…

朶 …（只睨む）

伊藤 おかしいなあ…似てるんだけどなあ…

朶 知らないわよ。

伊藤 ホントすいませんでした。

朶 いいわよ、もう。

茜 累、あんたホントにお姉ちゃんのこと覚えてないの？

累 一人っ子だつて云つてるじゃない。

茜 幼いころ養子に出された姉とかいない…わよね…。

望 往生際が悪いわね。

須藤 …伊藤。

伊藤 …。

須藤 伊藤だよ、どう見ても伊藤だよ。

伊藤 だから俺は伊藤だよ。

須藤 でも伊藤じゃないんだよな…。不思議だ…。

江藤 彼は朶さんのことは知らないの？

須藤 （朶を上げしげと見て）…あ、どうも、初めまして。

武藤 朶さん、ホントに嘘だったの、あれ。

朶 ホントよ！ まったく口から出任せ！

武藤 こんな偶然あるのかなあ…

累 だいたい、なんで銃が空砲だったの？ あんたたちちゃんと点検したの？

後藤 ボスのだつて空砲だったじゃないすか。

累 あたしは点検しなかったわよ。

須藤 威張つて云わないでくださいよ。

望 点検とかそう云う問題じゃないわ。あたしの銃も空砲だった。

朶 あたしのもね。

望 どういうことなの？ いったいなにがどうなってるの？

茜 まいった、わね。

江藤 このなかで矛盾を抱えていないのは俺と、朶さんくらいか…。

朶 あたし、あたし抱えてるわよ！ 大きな問題よ。

江藤 どんな？

茜、望を除く全員が朶を見る。

朶 え、それは、とにかく、大問題なんだけれども、まあ、たいしたことないって云えばないと云うか…

武藤 今更隠し立てはないでしょ。みんな煮詰まってるんだから。  
 霞 そんな…だって…あたし…  
 望 あたしたち知ってるからいいわよ。ちよつと云い難いことなの。必要なら後で教えるから。  
 江藤 まあとにかく問題を整理してみましょつ。とにかく、今朝の隕石騒ぎから、少しづつおかしい事が起こっているわけですよね？  
 武藤 隕石騒ぎ？ ああ、それであの音が…  
 茜 ちよつと、あんた、なんで知らないのよ。艦内放送聞いてなかったの？  
 武藤 いやあ、まだ夜中だったし…寝てたから…  
 茜 寝てたあ？  
 後藤 ちよつと待てよ。隕石騒ぎは昼頃だぞ。  
 武藤 いやいや、違いますよ。朝方。ねえ。  
 雫 そうよ。  
 望 昼つてことはないわよ。朝だったけど…でも早朝とは云えない時間よね。  
 菜 ちよつとちよつと、あんたたち。…午後。  
 後藤 はあ？  
 菜 午後よ午後。午後三時くらいよ、あれ。  
 江藤 そうですね。確かそのくらいでした。なあ。  
 伊藤 はい。間違いないです。MCがミサイル保管庫の点検に行くのがいつも二時半くらいですから。  
 望 ちよつと待つてよ、なんでこんなにバラバラなわけ？  
 茜 朝よ。当事者の操舵室が云つてんだから間違いないでしょ。  
 望 まあ、当事者って云えばあたしたち全員そうだけどね。  
 武藤 夜中ですつて。僕いつも結構早起きなんです。雫さんは違うけど。  
 雫 一言多いけどその通りよ。  
 累 お昼よ。だって爆発時刻のセット、正午だもん。  
 江藤 それだ。…爆発そのものの原因は、本当にレーダースの仕業だったのか。  
 累 妙な名前付けないでちょうだい。  
 伊藤 だって、さっき彼が…  
 後藤 ん？ ああ、口から出任せ。  
 望 嘘よ、あんたたち指名手配のレーダースじゃない。  
 累 だから違うつてば。  
 茜 ここにも食い違いがひとつ、か。  
 江藤 どうなんです。本当に爆弾を仕掛けたんですか？  
 須藤 いやあ、それが…なあ…。  
 後藤 うーん。  
 江藤 なんです？  
 後藤 今更云つていいものか、なあ。  
 須藤 なんか、なあ…  
 菜 なによ、じれつたいわね、云いなさいよ。  
 累 協力者がいるはずなの。この船に。  
 望 協力者？  
 須藤 そいつが爆弾を仕掛けて、その騒ぎの際に俺たちが…ね。

後藤 俺たち、顔は知らないんだけど、その…  
 菜 なに、  
 後藤 そいつは、その、コックらしいんだ。

全員が江藤を見る。

江藤 …え。……おれ？

菜 コックって云ったらあんたしかいないわよ。

江藤 俺が協力者？ 海賊の？ そんな馬鹿な。

後藤 やっぱりね。

須藤 驚きません、もう。

菜 じゃあ誰が爆弾を…？

雫 そもそも爆弾かどうかも怪しくなってきたくない？

武藤 時間の食い違い、記憶の食い違い…か。

江藤 時間の食い違いって云うことは…

望 そうよね…。

茜 なに？

望 そもそも今日って、何日なの？

一同、黙る。

菜 セーの、で云うわよ。(一同頷く)セーの！

望・茜 五月二日！

後藤・須藤・累 四月二十九日！

武藤・雫 五月一日！

菜・江藤 四月三十日！

一同、黙る。

一同「なんでバラバラなのよ！」「一田でしゅうが！」「なに云ってんだお！」「三十三日よ！」「まだ五月になってないでしゅ」などなど、全員が口々に叫び出す。どさくさ紛れにウルトラマン等と呼ばれるやつがいたりしても良い。やがて叫びはお互いの責任転嫁に変わる。

茜 だいたい、あんたたちが悪いのよ！ 大事な妹を海賊なんかにして！

累 妹じゃないってば！

望 やっぱりあんたたちなんか企んでるんでしょ！

須藤 俺たちだって、なにがなんだかわからないんだよ！

菜 あんたの無謀運転がいけないのよ！ だいたいあんたは昔っからねえ…！

茜 あ、あたしのせいにすんの？

伊藤 …雫、雫…！

雫 ちょっとどさくさ紛れになにすんのよ！

伊藤 あ、つい…

後藤 なんか腹減ってきたやつだなあ、コックさん、なんか作って。

江藤 どうやって！ なにを！

霞 とにかく地球に連絡とりまじょうよ！

武藤 それができたらとっくにやってますよ！ せめて船を地球に戻すとか！

茜 どうやって？ いくらあがいてたって、今、この船はまっすぐ進むだけなのよ！

最後の茜の言葉に、一同叫び疲れて黙ってしまつ。気怠い沈黙が流れる。

後藤 …俺たち…なんなんだろ…。

望 …なんだかもつ、よく判らなくなつてきちゃつた…。

雫 …もしかして…あの噂ってホントのことだったのかしら…。

累 …噂って？

雫 この船が、ツアーを装った追放船だつて云つ…

望 追放船ってなんのことよ。

武藤 地球にとつての厄介者を、ツアーを名目に宇宙の果てに追っ払おうつて云つ…

須藤 厄介者？

雫 …なにそれ、知らないわよ、そんな噂。

望 …誰から聞いたの、それ？

雫 …誰から？ それは、噂だから、誰からともなく…誰からだったかしら…

武藤 …MCはその監視役だそうなんです。

茜 …MCがあ？

雫 …そう云えばMCは？

江藤 …ミサイル保管庫に点検に行つたきり。

望 …うちのは爆発のショックで、ノックダウン。

武藤 …うちのは僕が…(殴る手つき)…ノックダウン。

霞 …レーザー室は？

累 …レーザー室にMCはいないわよ。

茜 …いない？ どうして？ そんなの初めて聞いたわよ。

後藤 …さあ、別に不思議にも思わなかつたけど…そう云えばどうしてなんだろ？

須藤 …全然、気にしてなかつたなあ。

望 …じゃあこの船には全部で三体のMCがいるつてことね。

雫 …。あたし思うんだけど…この船のなかの時間つて、MCが管理してるのよね。

江藤 …部屋にある時計は、MCの内部時計とシンクロしてるらしいよ。

雫 …日付だつて、MCが云つてる日付を信じてるわけよね。

霞 …と云つことは…。

伊藤 …それぞれ部屋のMCが食い違つてることですか。

雫 …でもMCは全部でひとつの機械だつて云つてたわ。根っ子は繋がつてるんだつて。

霞 …どこがおかしくなつてるのかも…。

望 …MCがあ？

雫 …そもそもMCつてなんなの？ なんの略？

武藤 …メイン・コンピュータ…じゃないんですか？

江藤 …マスター・オブ・セレモニー…かも。

累 …なに、それ。

後藤 …司会進行役。

累 …進行役…？ なんの？

江藤 …このツアーの、だろ？

雫 …本当にそれだけ？

伊藤 ……この騒ぎの。

武藤 …この全ての出来事の…。

茜 じゃあ、MCが黒幕だって云うの？  
 霞 MCが…？  
 望 MCが…。

いきなり、MC、登場。  
 一同、息を飲む。

望 え、MC…！  
 後藤 あいつがMC？  
 須藤 らしいな。  
 朶 あれウチのMC？  
 伊藤 たぶん…。  
 累 細ちゃん！

MCの後ろに細、登場。

細 なんだか様子が変わなの、このひと。  
 武藤 ああまた増えた…。  
 霞 誰？ あの子。  
 須藤 レーダー室の細ちゃんデス。  
 後藤 人質デス。  
 累 よくわかったわね、ここ。  
 細 あたし、地図あるから。  
 江藤 どうでもいいけど滅茶苦茶狭いな。  
 望 様子が変わって？  
 細 なんだかぼうつとしてるみたい。まるで夢遊病みたい…。  
 茜 夢遊病？  
 霞 やっぱり故障してるのかしら。

茜、MCの目の前で手を振ったり、頬を抓ったりするが、ほぼ無反応。

茜 放心状態ね…。  
 武藤 そうだ！ 雫さん！  
 雫 な、なによ。

武藤 催眠術。  
 雫 はあ？

武藤 催眠術ですよ。催眠術でMCの心のなかを探れば、この混乱した状況を打開するヒントが見つかるかもしれない。

後藤 催眠術う？

望 相手はコンピュータよ。機械なのよ。機械が催眠術にかかるわけないでしょ。

朶 馬鹿。

望 馬鹿。

累 馬鹿。

武藤 うわ…三連発…。でも、でもですよ、機械のくせに放心状態になってるわけじゃない、だったら催眠術だって…

霞 これはただ故障してるだけじゃないかしら。

須藤 馬鹿。

江藤 馬鹿。

後藤 馬鹿。

伊藤 馬鹿。

武藤 クソ、なんか矢鱈やたらむかつく…。隼さん！この常識に首まで浸かった想像力欠如人間どもに、目に物見せてやってくださいよ！

隼 無理だと思っけどなあ…。

茜 いいからやってみなさいよ。

武藤 航海長…。

茜 茜って呼んで。あなたの気持判るわよ。ときめきと浪漫ろまんが、現代人には欠けているのよね。

朶 馬鹿は馬鹿を知る。

茜 だまらっしやい。

隼 でも通信講座だし…

武藤 いいじゃないですか、ダメで元々ですよ。

隼 …じゃあ、まあ…。

隼、MCの前に行き、話しかけはじめる。

隼 …では、MC…よく聞いてね…心を静めて…リラックスして…少し時間を遡さかのぼってみましょう…そう…。さあ…あなたの名前は？

MC …「こぎつね」メインコンピュータ…攻撃センター担当サブシステム…

隼 あなたは、今、どこにいますか？

MC …宇宙船…の…なか…

須藤 そのままやないかい。

武藤 シーツ…。

隼 …「こぎつね」のなかですね？…ひとりですか？…まわりに誰かいますか？

MC …まわりには…私と同じMCが…三体…それから…人間が…たくさん…

望 三体…？ 数が合わないわ…。

隼 人間は何人いますか？

MC ……十五人…。

累 十五人？

江藤 ここには？

後藤 十二人…。これも合わないな…。どうなってんだ？

隼 …他にはどんなものが見えますか？

MC ホールの…床……それから…大きな…扉……

隼 …扉？…どんな扉ですか？

MC 大きな…扉…音も…衝撃も…伝わらない…中央…倉庫の…扉…

累 中央倉庫…。

須藤 中央倉庫…！

隼 …扉は閉まっているんですね？

MC …扉は…開いている…。

…と部屋の空気が揺れる。



雫 もう一度云ってください、扉は…

MC 扉は…開いている…でも…もうすぐ…閉じる…

後藤 なかは…倉庫のなかにはなにが！

雫 静かに！…MC、よく見て答えてください。扉の向こうにはなにが見えますか？

MC …。中央倉庫を…開けてはいけない…中央倉庫を…開けては…いけない…い…

雫 MC…MC！

雫 なに？ どうしたのよ？

雫 なんだか、心に鍵がかかっているみたい。これ以上は危険だわ。

望 心に鍵？ だってコンピュータでしょ？

雫 メモリがプロテクトされてるってどこかしら。

須藤 どういうことなんだよ。倉庫を閉じたとき俺たちがそこにいたっていつのか？

霞 そんなの覚えてないわ…。

後藤 そもそもいつの話なんだ、それ。

雫 MC…聞こえる？…それはいつのこと？…そうじゃないわ、えーと…あなたは現在からどれくらい時間を遡ったの？

MC …。現在から…十年…今から十年前のこと…。

部屋に深い沈黙が下りる。

朶 十年前…。

須藤 十年前…。

霞 十年前から、わたしたちは…。

望 この船に…。

累 この船にいたって云うの…。

後藤 そんな馬鹿な…。

茜 誰か…。

一同 …。

茜 誰かこのなかに、十年前、自分がどこでなにをしていたかハッキリ云える人はいる？

一同 …。

茜 自分が本当は誰なのか、自信を持って云える人は？

一同 …。

茜 あたし、これから中央倉庫に行くわ。

望 どこにあるのか判らないじゃない。

細 …。地図があるわ。

茜 …。一緒にいきたい人だけ、行きましょ。ここに残りたい人は？

一同 …。

茜 …。そつ。じゃあ、行きましょ。…後悔することになるかもよ。

朶 慣れてるわ。

茜 お黙り。行くわよ…！

全員、退場。  
暗転。

## 管制室／三原則／回復 シーン12

管制室。加藤、佐藤、鼎、工藤。

佐藤 室長、彼らは中央倉庫に向かっています。

加藤 コンピュータに催眠術をかけるとは、考えられんことをする奴らだな…。

佐藤 それにしても、いつたいこの会話は…

鼎 滅茶苦茶じゃないですか。宇宙海賊だの、十年前から「こぎつね」に乗ってるだのって。

加藤 工藤くん。宇宙船の乗組員が、集団で妄想にとり憑かれるというような前例は？  
工藤 宇宙旅行のストレスからくるノイローゼの例はありますが、乗組員全員が妄想というのは…。

佐藤 MCがエラーを来しているというのは本当なんでしょうか。

鼎 ありえないことじゃないけど…。でもMCはロボット三原則に準拠してますから、たとえエラーを起こしても、人間の不利益になるような行動はとれないはずです。

佐藤 三原則って？

鼎 ロボットが人間の命令を守り、人間を傷つけないように決められたルールです。

加藤 鼎くん。この電波は？

鼎 室内だけでなく廊下の声まで聞こえるということは、恐らく非常用の艦内モニタが作動しています。全艦放送用のスピーカーから逆に音を拾って艦内の状況をモニタするシステムです。

佐藤 それがどうして地球に聞こえてくるんだ？

鼎 艦内モニタは一旦通信室にモニタされます。誰かが配線を変えて、それをそのまま地球送信回線に繋いでいるとしか考えられません。

佐藤 誰がそんなことを…。

鼎 わかりませんが、配線を組み替えることは、ツアー客には無理です。

加藤 工藤くん。彼らは…狂っているのか。

工藤 狂っているという状態の定義によります。

加藤 心理学の講釈はいい！ どうなんだ！

工藤 …可能性はあります。このままだと、集団的なアイデンティティーの喪失に陥ってしまうかもしれません。

加藤 アイデン…なに？

工藤 自分が誰なのかという問題に、白紙の答案を出すことです。

佐藤 それは危険な状態なのか？

工藤 最大級に危険です。その答案は白紙ではいけないんです。たとえ間違っていて、常になにかが書き込まれていなければいけない。今、彼らは必死です。必死にその答えを求めているんです。

加藤 中央倉庫に…か。なんとかして、自分たちが只のツアーの客であることを自覚させないと、彼らは中央倉庫を開けてしまうぞ。

工藤 心理学の立場から云えば…開けたほうがいい。

鼎 工藤くん…。

加藤 なにを云い出すんだ！ 中央倉庫は…中央倉庫は開けてはならん！

工藤 なぜ？

加藤 なぜ、だと。なぜでもだ！ そう決まっているからだよ！

工藤 加藤さん、ツアーの客に万一のことがあったら責任問題になるって仰おっしゃいましたよね。それなら開けさせるべきです。そうしないと本当に彼らは自分を失ってしまつ。それに…

佐藤 それに…なんだ？

工藤 たぶん、僕らも…

鼎 あたしたちが…なんなの？

工藤 このなかで、なぜ中央倉庫を開けてはいけないのか説明できる人はいますか？

一同 …。

加藤 それは…それが規則だからだ！

工藤 僕らは本当に、ただ規則に従って中央倉庫を開けさせまいとしているだけでしょ  
うか？ 僕は、怖いんです。正直云って、単に規則を守ろうとしているだけじゃ  
ない。無性に怖いんです。あの船の中央倉庫が開くことが。理由も判らず恐れて  
いる。…それは僕だけですか？

一同 …。

佐藤 俺たちも、直面するべきだつて云つのか？

工藤 それが、心理学の鉄則です。

四人、思い思いの沈黙に沈む。

加藤 …いかん。それだけは、許されんことだ。

工藤 室長！

加藤 呼びかけを続ける。

佐藤 …はい。(工藤と鼎に)さあ。

佐藤、鼎、工藤、計器に向かって作業を始める。

佐藤 …？

鼎 佐藤さん…これって…

佐藤 うん…。

加藤 どうした。

佐藤 室長、届いています。

加藤 …なに！

佐藤 間違いありません。こっちの電波が届いています。

加藤 …マイクを。

加藤、マイクを取り、しばし躊躇う。大きく息を吸う。

加藤 …宇宙船「こぎつね」の諸君。聞こえますか。こちらは地球。地球管制室…

暗転。

## ホールにて／合言葉／扉 シーン13

中央倉庫前のホール。  
乗組員全員がいる。

後藤 これが中央倉庫…か。

望 なんか、矢鱈重そうな扉ね…。

雫 こんなので、どうやって開くの？

栞 ミサイルでも撃つ？

江藤 そんな無茶な。

茜、扉にとりついて引つ張るが、ピクともしない。

茜 ダメだわ。なんとかしてよ！

武藤 なにか…なにかあるはずだよ。

雫 なにかって？

伊藤 カードスリットも、鍵穴もないです。

須藤 合言葉みたいなものとか…。

武藤 それだ、きつとそうだ。雫さん！ MCに聞いてみてください！

雫 ……MC、聞こえる？…中央倉庫を開ける方法は？

MC ……………。合言葉を…。

須藤 あたり！ やった！ 須藤ちゃんやったね！（はしゃぐ工藤を全員が見る）…失礼しました。

雫 その合言葉は？

MC ……………。

雫 MC、お願い、答えて…。合言葉はなに？

MC ……今日の…日付…と…キーワード…

後藤 今日の日付え？

須藤 痛いところを突いて来ましたねえ。

望 MC、キーワードってなんのこと？

茜 MC、今日は本当は何日なの？

MC ……………。

雫 ダメよ、いつべんに聞いちゃ。…MC、教えて、今日は何日？

MC ……今日…今日は今日、今日は今日はきまよは、きまよ、う、わ…………

雫 ダメだわ。…MC、判ったわ、落ちて着いて。…いい？ じゃあ、キーワードってなあに？

MC ……キーワードは…MCにセーブされて…います。

栞 あんたがMCじゃないのよ！

雫 怒鳴っちゃだめだつてば。

MC ……管理システムではなく…解除システムに…保存…

江藤 解除システム？

後藤 解除つて、なにを？

MC 設定された…記憶…人間を守る…ための…MCは…守る…人間を…

雫 なにから守るの？

MC ……絶望と……倦怠……から……  
一同 ……。

MC ……人間を……MCは……守る……守り続ける……更新する……偽の記憶を……守る……更新し続ける……十年間……守り続けてきた……

武藤 偽の記憶……。

望 あたしたちの記憶が、偽の記憶だって云うの？

零 解除システムって、なあに？

MC ……もし、すべてをリセットするなら……コール……緊急用……サブルーチン……

菜 ご破算にするためのMCがいるって云うの？ そんなのどこにいるのよ？

MC ……解除システムは……レーザー室……に……

茜 レーザー室！

後藤 まさか……

須藤 お、俺じゃないよ、俺じゃないよ……

後藤 判ってるよ！

累 ……紬ちゃん！

紬は、いつの間にかひとり離れて背を向けている。

紬、緩やかに一同を振り返る。

紬 ……もう、おわかりですよね。レーザー室にだけMCがないのではなく、レーザー室のMCだけが、人間の女性の形をしているのです。

累 紬ちゃん……あなた……

紬 私がレーザー室のMC。そして記憶解除用サブシステム。

茜 あんたが、アンドロメダ？

紬 管理システムは十年間、正常に機能していました。その間、あなたがた人間の記憶は、何度も塗り替えられ、深刻な絶望に陥ることなく、「こぎつね」は宇宙をひたすらに進み続けてきた。でも……MCがエラーを起こしたのです。あなたがたの考えたとおり、各部屋の時間が狂っているのはそのためです。だから解除システムが……私が起動したのです。

後藤 じゃあ、今日の爆発は……

紬 MCの仕業です。隕石群の接近も。実際には隕石など飛んできてはいなかった。でもMCは、あなたがたを、退屈させまいとしてあの騒ぎを演出し、爆発を仕組んで舵を効かなくした。

望 どうしてそんなことを！

紬 あなたがたに地球に帰りたいという気持を起こさせないためです。すべてはそのため。そのために、あなたがた自身が、偽の記憶を自分たちに植え付けることを選んだのです。

武藤 僕たち自身が……。

紬 そう。すべてはあなたがた人間の決めたこと。私たちはそれに従ってきただけです。

一同、沈黙する。

スピーカーから、雑音とともに、声が聞こえてくる。

スピーカーの声 ……こちら地球……地球管制室……「こぎつね」の諸君、聞こえますか……

細 MCに、通信回路の修復をさせてました。地球との通信は回復しています。船内モニタをすべてオンにしておきました。この会話も恐らく地球通信室に届いているでしょう。

スピーカーの声 …この声が届いていたら…どうか…聞いて欲しい…中央倉庫を開けてはいけない…もし開ければ…君たちはおそらく、今まで通り宇宙を旅していくことはできない…どうか信じてほしい…これは君たちの命に関わる問題だ…君たちの気持ちは判る…しかし、どうか思いとどまってほしい…我々には、それを告げることしかできない…どうか信じてほしい。こちらは地球管制室、室長・加藤。…私の云えることはこれだけだ。あとは君たちの判断に任せる…(雑音)

一同

茜 …細ちゃん、ううん、MC。…私たちにキーワードを教えてちょうだい。

細 …合言葉は簡単です、時間と場所。今日の日付と、私たちが今いる場所。

雫 今いる場所…?

細 (頷く)これで私の出来ることは終わりです。あとは、みなさんが、機械の私たちではなく、人間が判断するのです。あなたがたの自由に決めてください。

望 日付は？ 日付が判らなげや。

細 時間の管理は管理システムの仕事です。私にはわかりません。

伊藤 そんな無責任な。

須藤 片っ端から云ってみるか。

細 キーワードを間違つと、ロックされて二度と開きません。

後藤 簡単に云うな！ どうすりゃいいの！

霞 あ！

一同、霞を見る。

霞 あ、イヤイヤイヤ…

後藤 なんなんだ！

霞 あの…今日はね、今日はたぶん、たぶん四月二十九日だわ。…だと思っなあ…なんて。

後藤 たぶんじゃ困るんだよ！

霞 たぶんで云うか…恐らく絶対、間違いなく…四月二十九日。…の筈なんだけどなあ…

江藤 なんて判るの？

霞 え、それ、それは、その…えー、厚生大臣に聞いてもらうと、より確からしく…その…

伊藤 なんのことだか判らん。

霞 とにかく！…とにかく！絶対四月二十九日！ 間違いないわ！…なあって…

望、霞を見て口だけで「来たの？」と問い、霞「たぶん」と口だけで答える。  
望、茜に目配せする。

茜 判ったわ。信じるわよ。

武藤 え、だって、なにを根拠に？

茜 女の勘。グダグダ云わない！…いい？ いくわよ。

後藤 いや、ちよつと待て、だって場所は？

茜 そんなの決まってるじゃない。(扉に向かって大声で)…四月二十九日、場所、宇宙!…ここを開けて!

後藤 宇宙…って、そんな大雑把な…!

沈黙。短い電子音。プシューツという空気圧の抜ける音。

雫 あいた…みたいよ。

武藤 みたいですね。

茜 (糸を見て)…もったぶん解ってる。ほんとは解ってるんだと思う。でも、確かめなくちゃね。自分の手で、自分たちの手でこの扉をあけなくちゃ。…自分たちで閉ざしたこの扉、あなたたちが守ってきてくれたこの扉を、もういちど…。

茜、扉に近づく。

茜 (一同を振り返る)…ここにいたくない人は…かまわないのよ。

誰一人、動こうとするものはいない。

雫、伏せていた顔を上げ、扉に近づく。  
二人は静かに扉を左右に開いていく。

## 再生／歴史／一億一番目の子供たち シーン14

扉の向こうに、管制室の人々が後ろ向きに立っている。  
その向こうには輝くスクリーンが見える。  
管制室の四人は、ゆっくりとこちらを振り向く。  
今や全ての人々の目に、過去が、映し出されている。

雫 思い出した…。それは昔むかしのこと…。

茜 思い出した…。それは私たちが生まれる遙か以前のこと…。

霞 思い出した…。年老いた太陽が子供たちを飲み込もうとしていた時代…。

朶 思い出した…。太陽は一生を終えようとしていた…。

須藤 人の一生を一億回繰り返す長さの一生を。

望 そのとき、私たちの祖先は地球を離れ旅に出たのだ。

累 想像を絶する混乱のなか…

後藤 膨張を続ける太陽から逃れ、居住可能な惑星を探すために…。

工藤 八十八艘の船を駆って、

鼎 人類は太陽系を脱出した。

佐藤 アンドロメダ、一角獣、射手、いるか…

朶 それ以来、どれだけの歳月が流れたのだろう…。

佐藤・鼎 インディアン、魚、兎、牛飼…

祖先たちの物語に、星座の名前を詠唱する声が重なりあってゆく。

佐藤・鼎 …海蛇、エリダヌス、牡牛、大犬、狼…

伊藤 八十八艘の船の中で…

鼎・累 …大熊、乙女、牡羊、オリオン…

武藤 かつて地球という小さな星から見えた、八十八の星座の名を冠し、

累・須藤・工藤 …画架、カシオペア、かじき、蟹、髪の毛、カメレオン…

望 ただひたすら新しい大地を求めて虚空をさすらう箱船の群。

工藤・江藤 …カラス、冠、巨嘴鳥、馭者…

霞 その中の一艘に、私たちは生まれた。

茜 夏、東の空、白鳥と鷺のあいだ、

須藤・工藤・江藤 …麒麟、孔雀、鯨、ケフェウス、ケンタウルス…

加藤 アルタイルとデネブを結ぶ線の中央付近にひっそりと横たわる小さな星座…。

工藤・江藤・伊藤 …顕微鏡、子犬、子馬……小狐。

星座名を詠唱する人々は、ひとり、またひとりと座っていく。  
見上げる空には満天の星が輝いている。

望 それが私たちの故郷の名前だった。

茜 私たちはここで生まれた。

霞 私たちはここで育った。

雫 私たちは、一億一番目の、子供だった。

朶 小熊、小獅子、コップ、琴、コンパス、祭壇、蠍、三角…

物語を続ける人々も、やがてひとりまたひとりと、座っていく。



武藤 太陽系を離れ、ひたすらに銀河を突き進むうちに、人類は疲れ始めた。  
 菜・佐藤…獅子、定規、槓、彫刻具、彫刻室…

加藤 世代を経るにつれ目的意識は薄れ、絶望と倦怠が広がっていった。

佐藤・菜・伊藤…鶴、テール山、天秤、蜥蜴、時計、飛魚…

望 多くの人々が、脱落していった。

伊藤・加藤・江藤・須藤…船尾、蠅、白鳥、八分儀…

後藤 多くの船が、自らエンジンをストップさせていった。

佐藤 あてもなく宇宙の闇を進むより、宇宙空間に浮かぶ小島の住人として生を終えることを、人類は選んだ。

須藤・工藤…鳩、風鳥、双子、ペガサス…

零 そのなかで只一艘の船だけが、新たな世界を求め飛び続けることを選んだのだ。

須藤・工藤・後藤…蛇、蛇遣い、ヘルクレス、ペルセウス…

工藤 十五人の乗組員と人間型コンピュータ四機だけを乗せた、宇宙船「こぎつね」。

後藤・鼎・累…帆、望遠鏡、鳳凰、ポンプ…

望 私たちは若かった、とても

後藤・鼎・累…水瓶、水蛇、南十字…

零 求め続けることを選ぶだけの若さがあった。

後藤・鼎・累…山羊、山猫、羅針盤、竜、竜骨…

茜 地球も太陽も知らない、人類最後の、開拓者

霞 最後の一艘。

鼎・累・望…南の魚、南の冠、南の三角、矢…

武藤 そう、はつきり覚えている。次々に途絶えてゆく八十七艘からの、最後の連絡…

零・加藤・望…猟犬、レチクル、炉、六分儀、鷲…

全天八十八星座すべての名が唱えられ、今や全乗組員が、幼い子供のように、膝を抱いて夜空を見上げている。

佐藤 そして僕らはひとりになった。

望 私たちが恐れたのはたったひとつ。

霞…絶望と倦怠。

武藤 だから僕らは、十年間、自分で自分に暗示をかけ続けてきたのだ。

後藤 あるときは宇宙海賊だった。あるときは地球を追われた異端者の集団だった。どんなときでも、地球との連絡をとりながら、どこまでも宇宙を進んできた。どこまでも…

細 十年前、あなたがた十五人の少年は、他の船を残し、たった一艘で進み続けることを選択しました。孤独から来る絶望は、最も避けなければならなかった。だからこの方法を選んだのです。どんなときでも、中央倉庫が地球の役割を果たし、あなたがたの精神的バランスをとり続けてきたのです。

累…地球はもう、ないのね。

茜 よく覚えてる…。見たこともない星、地球…。いいえ、地球だけじゃない、地球も月も、火星も木星も、大人たちのお話のなかだけに出てくる太陽系の惑星たち…。そして脱出の様子。年老いて、膨らみきって、すべてを呑み込もうとする太陽…繰り返し聞かされて育った。子供心に、怖かった。

細 この船は、記憶の運搬船でした。この中央倉庫には、太古からの人類の記憶が保存されています。私たちMCは、そこからいくつもの幻想を紡ぎだして、あなたがたに与えていたのです。

零 本当は、どれくらい経っているの？ わたしたちが持っているこの記憶のなかの地球は、どれくらい昔の地球なの？ 本当は、今は何世紀なの？ そんなことを云ってもわからないかしら？

細 太古、西暦という年月の数え方があったことは知っています。それに換算すると、ざっと六百万…

零 六百万…六百万年も経ったって云うの？

細 いいえ、世紀です。…六百万世紀です。

須藤 六百万世紀…

後藤 六十億年…

細 そう、太陽とその子供たちである惑星が誕生し、太陽系が生まれてから、ほぼ百億年が経ったのです。

一同、言葉もなく立ち尽くす。

細 よかったのでしょうか、これで。

茜 なにか？

細 解除の手順です。ただ事実を突きつけるだけでは、ショックが強すぎて危険だった。あなたがたが、自分で知りたいと思えば、あなたがた自身が扉を開けるようにならなければならなかった。これでよかったのでしょうか？

望 解除システムの起動条件はふたつ。ひとつは居住可能な惑星の探知、もうひとつは…

柔 MCだけでは手に負えない異常事態の発生…

細 状況は複雑でした。あなたがたの記憶はすでに綻びかけていた。限界が来ていたのです。新しい記憶に切り替えなければならぬ時期だった。

茜 そこに管理システムの異常が重なった。二重の危機だったわけね。…大丈夫。判断は正しいわ。解除の手順も完璧だった。あなたはよくやってくれたわ。

細 …ありがとうございます。とても…とても嬉しい。

後藤 船の現在位置は？

細 竜骨座 から二光年の位置です。

鼎 舵の補修は済んだの？

細 今、二体のMCが修理中。あと二十分で完了します。

江藤 とりあえず問題はなし、か。

茜 いいえ、あるわ。

一同、茜を見る。

茜 これからのことよ。…MCによる自己暗示システムの優秀さは、十年間このシステムを保持してくれたことで証明済み。でも、これから先はどうするの？

一同 …。

茜 また、同じシステムに頼ってやっていくのも手よ。恐らくそれが一番安全。累 …でも。

茜 他の船のことを覚えてるでしょう。彼らは孤独と絶望に耐えられなかった。私たちがだつて、これから何十年と飛び続けていくうちになんかどうなるかわからないのよ。後藤 最も恐ろしい敵…絶望と倦怠…か。

茜 今回の事故はいい機会かもしれない。慎重に決めなくちゃ。どうする？

佐藤 偽りの記憶に頼って生きるか、十年前の自分たちに戻るか…か。

須藤 ま、航海長に任せますよ。

江藤 そつだな。

茜 えっ、ちよ、ちよっと待ってよ。

朧 あんた決めていいわよ。

望 そつね、決めてもらいましょ。

霞 それがいいかも。

茜 待ってってば！ だって、航海長ってというのは偽の記憶で…ホントはみんな対等じゃないのよ！

武藤 でも、余韻っていうものがあるし。

雫 なんかに向いてそつよね、仕切るの。

工藤 心理学的にもそれがいいでしょうね。

鼎 宇宙工学的にもグッドよね。

茜 宇宙工学、全然関係ない！ ちよっとお！

累 じゃ、お願いね、お姉ちゃん。

一同、茜、紬、MCを残し、ソロソロ退場。

茜 こら、ちよっと、待ちなさいよ！ 卑怯者！

紬 …。

茜 …。あのさ、紬ちゃん…

紬 …。

茜 …人間が決めるのよね…。

紬 ハイ。

茜 …(放心状態のまま立ち尽くすMCに向かって)MC！ もう、あんなに口うるさかったのに、肝心なときに役立たず！

ふいにMCの表情が動き、ニヤッと笑って茜を見る。

MC …機械っていつのはだいたいそついうもんですよ。

茜 …あんた！ 直ってんじゃない！ 騙したわね！ このアンドロ…

MC アンドロメダにも生き居くらいでできるんですよ…さ、航海長。(マイクを差し出す)

茜 …。

紬 指示を。

茜 …。

茜、決意を込めて、マイクをとる。

茜 こちら航海長・茜。全艦乗員に告ぐ…。

暗転。

## エピソード／操舵室／MCたち シーン15

操舵室。

MCが運転席にいる。その横に紬。

紬：左舷前方に小物体。隕石ね。

MC 距離は？

紬 0・3光年。

MC：ちよつと迂回しとくか。

紬 了解。(マイクに)こちら操舵室。左舷0・3光年に隕石。迂回します…。

茜、登場。

茜 (欠伸しつつ)おはよう。…MC、替わるわ。

MC 少し右回りをお願いします。

茜 はいはい。

茜、運転席に。

望、霞、登場。

望 おはよ。

紬・MC おはようございます。

霞 紬ちゃん、替わるわ。

紬 はい。

武藤と霞、登場。

武藤 お邪魔します。あの…

霞 武藤くん、いいわよ…

武藤 いやあ、でも、はつきりさせとかないと…あの、霞さん、今日何日ですか？

霞 は？

望 もう時間正確になってるはずよ。

武藤 いや、念のため、一番確実な霞さんに確かめようと思って…

霞 十月八日よ。

武藤 ほら！ やつぱり。ね、霞さん、やつぱりですよ！

霞 だから、いいから帰りましょ。

茜 なんのこと？

武藤 いや、あのね、ひよつとして僕たち…

霞 あ、あーッ！ いいから…いいーからッ！

霞、武藤を引っ張って退場。

望 はあん？

茜 なに、あれ？

栗、伊藤、登場。

栗 ちよつと茜！ なんて隕石迂回すんのよ！ ミサイル発射訓練させなさいって云ったでしょ！ 絶好の標的じゃないのさ！

茜 いちいちつきあってらんないわよ、そんなの！

伊藤 だから云ったじゃないですか、隊長。無理ですよ。…ところで霞さん、今何時ですか？

霞 時間までわかんないわよ！ 時計見てよ！

江藤、登場

江藤 あ、いたいた。おい、部屋空けちゃっていいのによ？

朶 あそこにいたってしょうがないでしょ！ 攻撃目標ちょうだいよ！

後藤、朶、登場

後藤 あ、いたいた。江藤さん、MCが呼んでるよ。

江藤 あ、わるい。すぐ行く。よし、これで…

朶 なんなのよ。

江藤 MCに云って、食事、俺が作れるようにしてもらったんだ。これで腕が振るるぞ。

望 なに、今日から手料理ってわけ？

後藤 江藤さん、で、例の件…

江藤 ああ、いいよ、いいよ、手が足りなくて困ってたところだから。

茜 なんのこと？

朶 あたし、お料理習おうと思って…

後藤 ボスの手料理…楽しみだなあ…

朶 ボスは止めてって云ったでしょ。

後藤 あ、ごめん。

須藤、パジャマで登場。

須藤 あ、いた。おい。レーター室空けっぱなしだぞ。なんとかせいで。

後藤 なんとかかって、おまえの当番だろ、今日。

朶 寝過ぎなのよ、あんた。ねー。

後藤 ねー。…さ、行く。

朶、後藤、退場

江藤 んじゃ、また。よおーしつ！ 煮るぞ、蒸すぞ、炒めるぞお！

江藤、退場

望 あの二人、いつからあんなことに？

須藤 …さあ…たぶん、俺が寝てるあいだに。

伊藤 さ、隊長。行きましょ。ミサイル点検の時間ですよ。

朶 点検だけしてたってしょうがないじゃないよ！

朶、伊藤、会話しつつ、去っていく。

伊藤 いいからいいから。それより隊長の番ですよ。

朶 えー…ル…ルフトハンザ。

伊藤 ザル。

栗 ルールブック。

伊藤 クロール。

栗 ……なんであんたまでそんなに強いのよっ！

栗、伊藤、退場。

須藤 ……そうそう、メインリーダーにちょっと気になるのが映ってるんだ。どうも惑星らしいんだけど…行ってみる？

望 ホント？ 距離はどのくらい？

須藤 五光年くらい。大きさは地球くらいで、もしかすると空気あるかも…。

望 ……どうする？

茜 よし。行ってみましょ！

須藤 んじゃ、詳しいデータ取って、こっちに送るわ。

茜 よろしく！

須藤、退場。

望 とりあえず、目標ができたわね。

霞 五光年でしょ、全速で飛ばして二年半か。

茜 ま、あまり期待せずに、気楽にいきましょう、気楽に。

スピーカーの声 (雑音)(加藤の声)…こちら中央倉庫の加藤。全艦乗員へ。大変なことが判明した(佐藤の声)加藤さん、よしまししょうよ…(加藤)なにを云つか。大事なことだろ…えー、航海長の決断により、地球消滅の事実を事実として目を背けずに認めるという条件付きで、乗組員それぞれが自由意志によりお気に入り的人格を選んでちょ、という新しい試みがスタートして半年が経過した。その間われわれ中央倉庫調査班が、保存されている膨大なメインメモリを探索したところによると、乗組員がその記憶を保持する人物が、それぞれ実に、実に意外な素顔を持っていたことが判明…一例を挙げると(雑音)(鼎の声)加藤さん、やっぱりマズいですよ(雑音)(加藤)などは、実は性転換したニューハーフだったというまことに意外な(雑音)(工藤)やめましようよ加藤さ(雑音)もつと意外なのは茜航海長の正体は(雑音)(佐藤)加藤さんてば！(雑音)(加藤)さらにここにいる鼎くんなどは実は(鼎)あ、あーッ！(工藤)いや、それは、それはシャレになら(雑音)…。

沈黙。

スピーカーの声 ……えー…以上、まことに意外かつ恐るべき事実ではあるが、乗組員一同気を落とさずに、一層、奮励努力していただきたい。以上、中央倉庫より、加藤がお伝えした。(プツリ)

沈黙。

望 ……別にね。

茜 ……気になんないわよね。

霞 所詮、過去の人のことだもんね。

望 このキャラクターが気に入ってるだけだし…。

茜 ……そうそう。

三人、素知らぬ顔で計器をいじったりしているが、耐えきれずに一斉に立ち上がる。

茜：やっぱり気になるわよ！

望：MC、あとお願い！

霞：ちよつと中央倉庫行ってくるわ！

茜：行くわよ！

三人、バタバタと退場。  
操舵室にはふたりのMCだけが残される。

MC・紺：了解。

MC、運転席。紺、レーダー前に。

二人の機械たちは顔を見合わせて、微笑む。

巨大な宇宙船は何処とも知れぬ空間を進んでいる。

幕。